埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書　第15集

庁鼻和城跡

1987.3

埼玉県深谷市教育委員会

埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書　第15集

庁鼻和城跡

1987.3

埼玉県深谷市教育委員会

序

今から600余年を遡る14世紀後半頃に、現在の深谷市大字国済寺の地に、深谷上杉氏の祖、上杉憲英が、庁鼻和城を築いたといわれています。以後200年以上もの長き間、深谷上杉氏は、深谷と周辺地域の支配者として活躍しました。深谷上杉氏は、今日の深谷の発展の基礎を固めたといえましょう。上杉憲英による庁鼻和城の築城は、深谷の歴史上、画期的かつ極めて重要な意義をもっているのです。

現在、庁鼻和城跡の中心部には、臨済宗の寺院である国済寺があります。国済寺は、康応２年（1390）、上杉憲英が、俊翁令山禅師を招いて創建した由緒ある寺院であり、数々の貴重な文化財が残されています。間もなく創建600周年を迎えることは、誠に慶賀すべきことであり、その記念事業として、位牌堂と研修道場を兼ね備えた施設“廳鼻和館”が建設されることになりました。建設にあたり、当市の文化財保護審議委員でいらっしゃる住職の細見修学氏をはじめ、関係者のみなさまの深い御理解と熱心な御協力により、事前に発掘調査を実施いたしました。ここにその貴重な成果をまとめることができたのは、誠にみなさまの御尽力の賜物であり、みなさまの郷土を愛する心に深い感銘を受けました。衷心より感謝を申し上げるとともに、国済寺とみなさまの、今後の一層の御発展を祈念申し上げます。

最近は深谷上杉氏に対する一般の関心も高まり、市政施行30周年を記念して昭和60年より始められた深谷上杉まつりも、盛大な賑わいをみせております。こうした様子を見るにつけましても、郷土を愛する心あってこそ郷土の歴史を伝える文化財は保護されるのであり、またそれ故に、文化財は後々まで伝えられなければならないと痛切に感じております。文化財保護の任にあたる者として、また郷土を愛する一人として、改めて身が引き締まる思いがいたします。市民のみなさまに、文化財保護に対するより一層の御協力をお願い申し上げ、序といたします。

昭和62年３月

深谷市教育委員会

教育長　鳥　塚　恵和男

例　　言

1．本書は、臨済宗国済寺の位牌堂兼集会施設建設に伴う、埼玉県深谷市国済寺521番地所在遺跡の発掘調査報告書である。遺跡名は庁鼻和城跡である。

2．発掘調査は、国済寺より深谷市教育委員会が委託を受け、昭和60年度・61年度の２ケ年度事業として実施した。現地発掘調査は、昭和61年１月21日から２月12日まで行った。

3．調査経費は、発掘調査原因者である国済寺が負担した。

4．本書の執筆・編集及び写真撮影は澤出晃越が行った。

5．挿図中の方位は座標北を示している。遺構の説明における数値は、特に断わらない限り、確認面においてのものである。

6．本書の作成にあたり、下記の方々から御教示・御指導を得た。

浅野晴樹　磯崎一、小川望、小俣悟

発掘調査の組織

調査主体者　深谷市教育委員会　教育長　鳥塚恵和男

事　務　局　深谷市教育委員会社会教育課　課長　飯島光武

課長補佐　河田記久平

文化財保護係長　河田記久平（昭和60年度、兼務）

工藤友明（昭和61年度）

主任　村田正義（昭和60年度）、小林京子

調査担当者　深谷市教育委員会社会教育課文化財保護係主事　澤出晃越

目　　次

序
例言
目次

Ⅰ　発掘調査に至る経過…… 1

Ⅱ　庁鼻和城跡の地理的歴史的環境…… 2

Ⅲ　発掘調査の概要…… 7

Ⅳ　遺構と出土遺物
　1．遺構…… 9
　2．出土遺物…… 20

Ⅴ．まとめ …… 25

写真図版

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図（１／40,000）
第２図　調査区周辺地形図（１／10,000）
第３図　庁鼻和城跡概略図（１／5,000）
第４図　調査区全測図（１／160）
第５図　第１～６号土坑実測図（１／60）
第６図　第７～12号土坑実測図（１／60）
第７図　第13～18号土坑実測図（１／60）
第８図　第19～24号土坑実測図（１／60）
第９図　第25～33号土坑実測図（１／60）
第10図　第34・35号土坑実測図（１／60）
第11図　調査区西側柱穴実測図（１／120）
第12図　出土遺物実測図(1)（１／３）
第13図　出土遺物実測図(2)（１／４・３・２）
第14図　土坑の方位と規模

Ⅰ　発掘調査に至る経過

埼玉県深谷市国済寺521番地にある国済寺は、深谷上杉氏の祖、上杉憲英が、康応２年（1390）、名僧俊翁令山禅師を招いて創建したと伝えられる、深谷市でも有数の由緒ある寺院である。現在、国済寺は、上杉憲英が構築したと伝えられる庁鼻和城跡の中心にある。

来たる昭和65年は、国済寺の創建600周年にあたる。昭和58年10月、国済寺の役員会により、創建600周年記念事業の実施が計画された。59年１月、先祖や壇家への報恩感謝の気持ちを込め、また、今後の国済寺の発展のために、位牌堂と集会室（研修道場）を兼ねた施設を建設することが計画され、実行委員会が発足した。60年１月、国済寺が庁鼻和城跡の中心にあることにちなみ、施設の名称を“廳鼻和館”とし、壇家により建設の推進が承認された。

庁鼻和城跡は、深谷市の歴史において極めて重要な遺跡であり、県選定重要遺跡、市指定史跡にもなっている。国済寺住職の細見修学氏は、深谷市文化財保護審議員であり、庁鼻和城跡の重要性は十二分に熟知しておられた。そこで、60年11月15日付けの文書により、“廳鼻和館”建設予定地の埋蔵文化財の取り扱いについて、細見氏から市教育委員会への照会があった。

市教育委員会は、埋蔵文化財の保護策について検討したが、建物の建設は止むを得ず、事前に発掘調査を実施して記録保存すべきであると判断した。庁鼻和城跡が県選定重要遺跡でもあるため、市教育委員会はこの判断に基づき、11月28日付け深教社発第415号にて協議文書を県教育委員会に提出した。県教育委員会からは、12月11日付け教文第843号をもって、事業計画上やむを得ず土地の現状を変更する場合は、記録保存のための発掘調査を実施すること、発掘調査の結果重要な遺構等が発見された場合には、その保存について別途協議することなどの指導を得た。

以上の経過から事前に発掘調査を実施することし、細見氏も発掘調査の実施について深い理解を示された。11月20日、予備調査として試堀を実施し、土坑等の遺構が存在することを確認した。この結果に基づき発掘調査計画を策定、市教育委員会が調査主体となり、昭和61年１月～２月に現地発掘調査を実施し、62年３月までに調査報告書を刊行することとした。なお、現地発掘調査にあたり、国済寺壇家役員の皆さんの協力が得られることになった。

昭和61年１月19日、調査原因者である国済寺と調査主体者である市教育委員会の間で、庁鼻和城跡発掘調査の委託契約が取り交わされ、現地の発掘は１月21日～２月22日の間に実施されることになった。

II　庁鼻和城跡の地理的歴史的環境

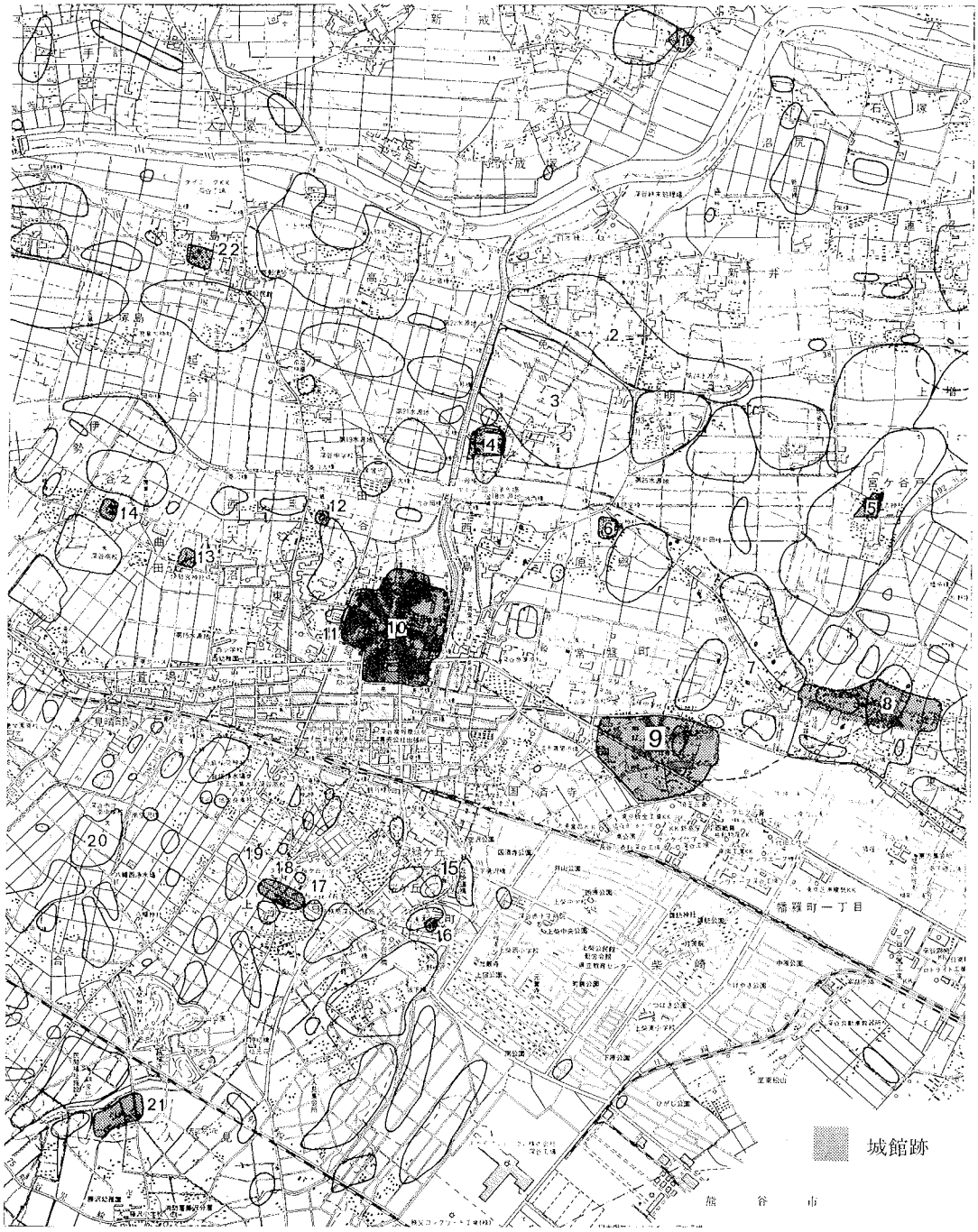
庁鼻和城跡は、埼玉県深谷市国済寺521番地ほか、高崎線深谷駅の東約1.7kmにある。櫛挽台地寄居面（御稜威ケ原段丘）の北端部に近く、標高は約39mである。

深谷市の地形を概観すると、市の中央部をほぼ東西に通る高崎線付近を境に、南半を占める櫛挽台地と北半を占める妻沼低地に二分される。櫛挽台地は、荒川の作用により形成された、寄居付近を扇頂として北へ広がる扇状地性の洪積台地である。妻沼低地は、利根川の作用により形成された沖積低地である。

櫛挽台地は乾燥した台地であり、しばしばひどい土埃に悩まされることがある。養蚕が盛んで桑畑が広がっているが、近年は花や植木などの栽培も盛んになっている。台地の北端部は、駅に近いこともあり、住宅などが急増している。構造的には、西北側の武蔵野面に比定される櫛挽面（櫛挽段丘）と、東南側の立川面に比定される寄居面（御稜威ケ原段丘）とで段丘状に形成されている。櫛挽面は、ほぼ高崎線沿いの崖線で、比高５～10mをもって妻沼低地と接しているが、寄居面は、高崎線より北へ1.5～1.8kmほど延びており、比高２～５mをもって妻沼低地と接している。接線付近の標高は、櫛挽面が40～50m、寄居面が32～36m、妻沼低地が30～31mである。櫛挽面の西には、岡部町山崎山などを含む松久丘陵を挟んで、立川面に比定される本庄台地が広がっている。寄居面の南には、荒川を挟んで、下末吉面に比定される江南台地が東西に延びている。櫛挽面の北東端近くには、第三紀層から成る残丘、標高98.0mの仙元山があり、熊谷市内の寄居面東端にも同様の残丘、標高77.4mの観音山がある。なお、台地北端部の、櫛挽面と寄居面の環境付近に、活断層（深谷断層）が確認されている。

妻沼低地は利根川流域に広がる肥沃な低地である。南は熊谷市付近を境として、秩父山塊に連なる台地や丘陵と大宮台地に挟まれた荒川低地に続き、東は加須低地に連なる。妻沼低地の南端、南に櫛挽面、東に寄居面を控える一画に深谷市の中心部があり、周辺では住宅が急増している。妻沼低地内は、現在はかなり平坦であるが、利根川の氾濫や流路の変遷等により、自然堤防が発達していたものと思われる。血洗島、矢島、大塚島、内ケ島などのように、島地名が多いこともこのことを裏付けている。現在、寄居面北端部との接線付近から西北へ、島地名の土地を包括して遺跡が連続していることが確認されている。このことは、自然堤防の状況をよく表わしているものといえよう。なお、この自然堤防を縦断するように、国道17号バイパスの建設が予定されており、現在、埼玉県埋蔵文化財調査事業団により、予定地の発掘調査が実施されている。多大な考古学的成果を挙げつつあるとともに、自然堤防の状況を詳細に知るための基礎資料になるものと思われ、成果の公表が大いに期待されるところである。

さて、10世紀頃になると、いわゆる武士団が歴史の舞台に登場してくる。武蔵国では、同族的武士団といわれる武蔵七党が著名であるが、大里・児玉地域には、猪俣党、児玉党、丹党、横山党の諸氏などが密集していたとされる。現在の深谷市域だけをみても、人見氏、内ケ島氏、横瀬氏、荏原氏、蓮沼氏らの猪俣党の諸氏や、渡来系秦氏の子孫といわれる新開氏などの館跡伝承地がある。



1．新開荒次郎館跡　2．上敷免北遺跡　3．上敷免遺跡　4．皿沼城跡　5．堀の内
6．伝幡羅太郎館跡　7．木の本古墳群　8．東方城跡　**9．庁鼻和城跡**　10．深谷城跡
11．深谷町遺跡　12．大沼弾正忠屋敷跡　13．桜田馬場　14．曲田城跡　15．桜ケ丘組石遺跡
16．秋元氏館跡　17．割山遺跡　18．割山西遺跡　19．鼠裏遺跡　20．萱場松原遺跡
21．人見館跡　22．内ケ島氏館跡

第1図　遺跡位置図（1／40,000）

大半の館跡伝承地は妻沼低地側にあり、肥沃な低地の豊かな生産力を基盤としていたことが知られる。人見氏の館跡伝承地のみ、櫛挽台地櫛挽面の押切川に開析された谷筋に立地し、今も土塁や空堀の一部が残されている（註１）。なお、これら諸氏の活躍の様子は、「吾妻鏡」、「太平記」などに散見される。これらの諸氏が、鎌倉幕府の滅亡、南北朝の動乱の時代に、北条氏、足利氏、新開氏などの狭間で、大いに動揺したことは想像に難くない。

14世紀後半、南北朝時代の後期に、深谷上杉氏の祖、上杉憲英が庁鼻和城を構築したとされている。憲英は、関東管領山内上杉憲顕の子である。現在、庁鼻和城跡の中心にある国済寺は、憲英により康応２年（1390）に創建されたと伝えられ、憲英が庁鼻和城を築いたのはそれ以前と推定される。憲英が庁鼻和城を築いた理由は定かではないが、上杉憲顕が貞治元年（1362）に上野国・越後国守護に復職していることから、上野国を本拠地として足利氏に抵抗していた、南長方の新田氏の活動を抑えること、越後国への通路を確保することなどが主な目的と考えられよう。憲英は応英11年（1401）に没し、墓は国済寺にある。

その後庁鼻和城は、憲英の子憲光、さらにその子憲長と受け継がれた。応永23年（1416）10月に始まる上杉禅秀の乱は、関東一帯と周辺地域を巻き込んだ大乱であり、当地域周辺にも大きな動揺をもたらした。この乱の背景として、惣領制の解体や在地領主制の形成などによる東国社会の動揺が把えられているが、庁鼻和上杉氏の場合も例外ではない。憲光、憲長は山内上杉憲基のもので禅秀方と戦っているが、憲光の弟の憲国は禅秀方についている。

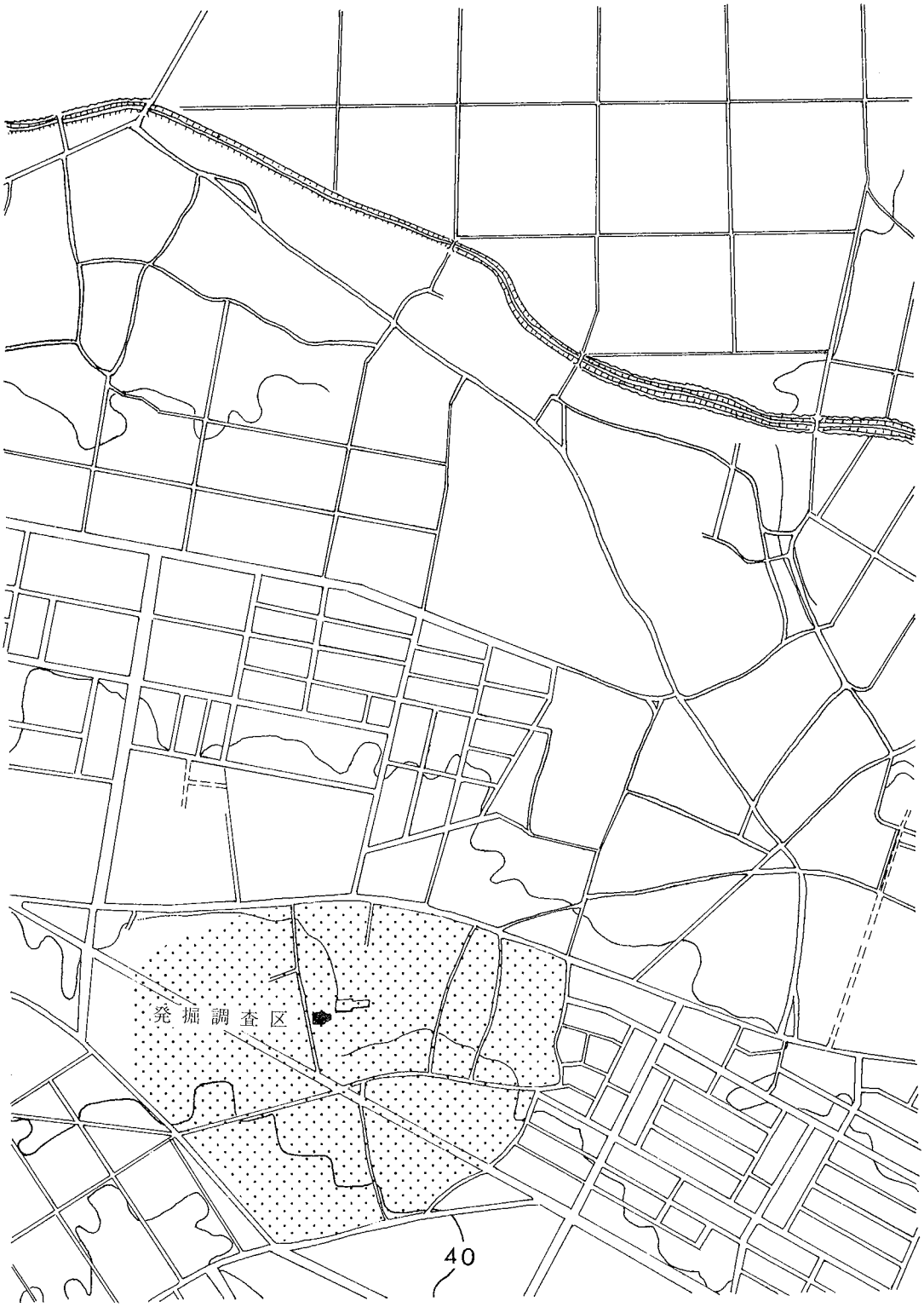
憲長の弟の憲信は、庁鼻和性順とも呼ばれ、永享の乱、結城合戦などに参加し、後には古河公方足利成氏との戦闘に奔走した。私立城主とする説もある。憲信の子、房憲は、足利成氏に対抗するために、康正２年（1456）、庁鼻和城の西北西約1.5kmに、より堅固な深谷城を築いたとされている。以後、深谷上杉氏の活動の中心は、深谷城になる。なお憲長の子、憲武は、人見氏の館跡を改修して居住し、人見屋形を称したといわれる。

こうした慌しい状況の中で、庁鼻和城は、その城としての機能を失なったらしいが、理由や経過等は不明である。

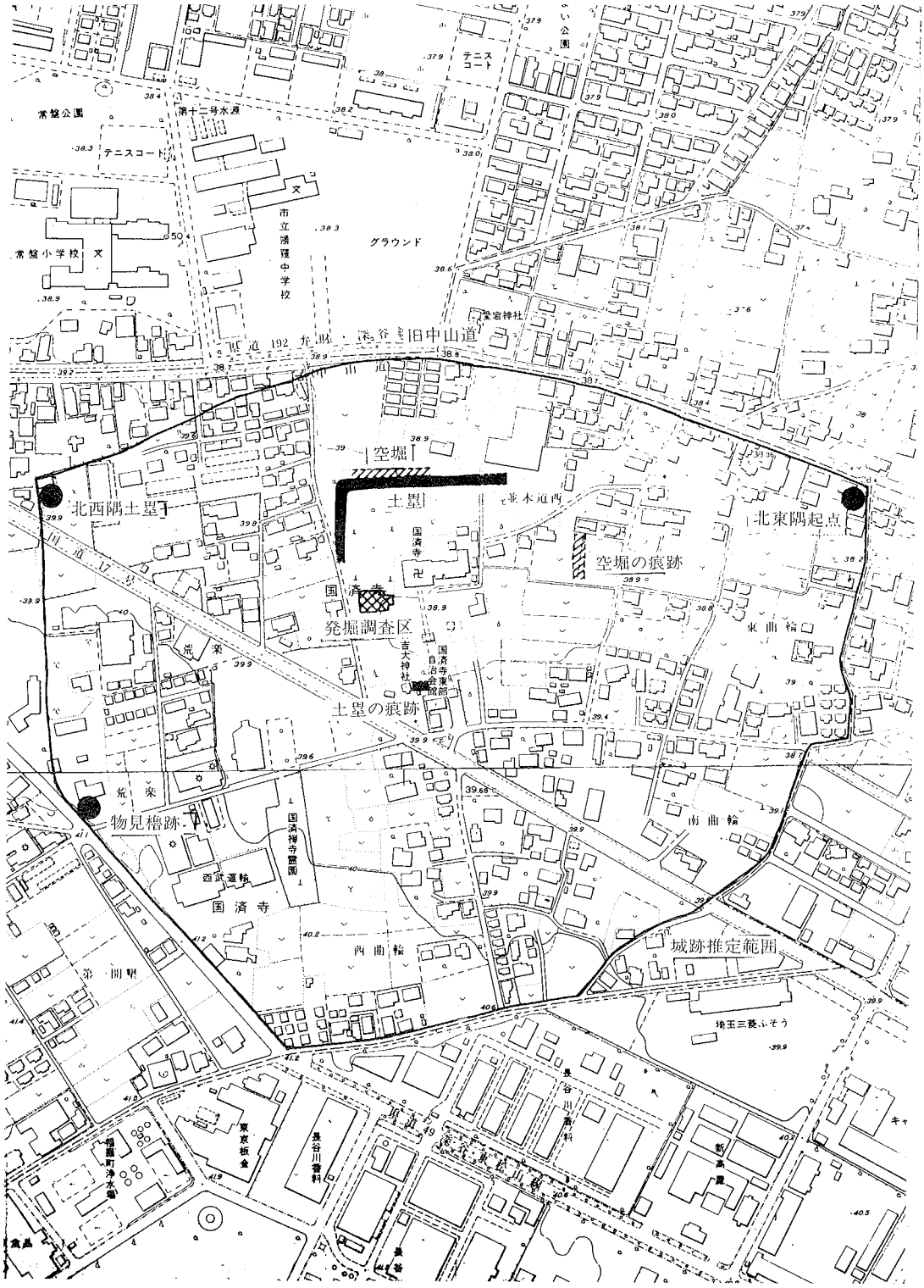
庁鼻和城は、現在の国済寺本堂を中心とする一辺約180ｍの正方形を呈する内郭と、東西約700ｍ、南北約500ｍの五角形に近い形状を呈する外郭から成っていたとされ、総面積は28haに及ぶ。内郭の北辺を形成する土塁と空堀の一部は今も残されている。外郭も土塁と空堀に囲まれていたとされるが、残存する遺構は全くない。物見櫓跡、北西隅外郭土塁、北東隅起点などの伝承地が残されているのみである。一帯の小字名には、東曲輪、南曲輪、西曲輪、出口などがある。外郭東辺の中央が大手門であったともいわれる。この東辺を南北に通る道は、鎌倉街道に通じるとされ、新田義貞が鎌倉攻めの際に通行したとも伝えられる。外郭北辺は旧中山道が東西に通っている。なお、庁鼻和城跡は、県選定重要遺跡、市指定史跡になっている。

註１　現在に残る遺構は、15世紀半ばに上杉憲武が改修した後のものである可能性が高い。

〈参考文献〉
「深谷市史」　昭和44年12月　深谷市役所
「深谷上杉氏の歴史」　昭和61年４月　深谷上杉顕彰会



第２図　調査区周辺地形図（１／10,000）



第３図　庁鼻和城跡概略図（１／5,000）

III　発掘調査の概要

昭和61年１月21日、パワーショベルにより、調査予定地の表土を削除することから、発掘調査を開始した。23日に仮設事務所を設置し、24日に器材を搬入した。

１月27日、確認面の精査を行い、約30基の土坑などの遺構を検出、第１号～第８号土坑を堀り始めた。28日、調査区の東端部には泥炭質の黒色土が薄く堆積しており、トレンチを設定して堀り下げたところ、土坑を検出した。

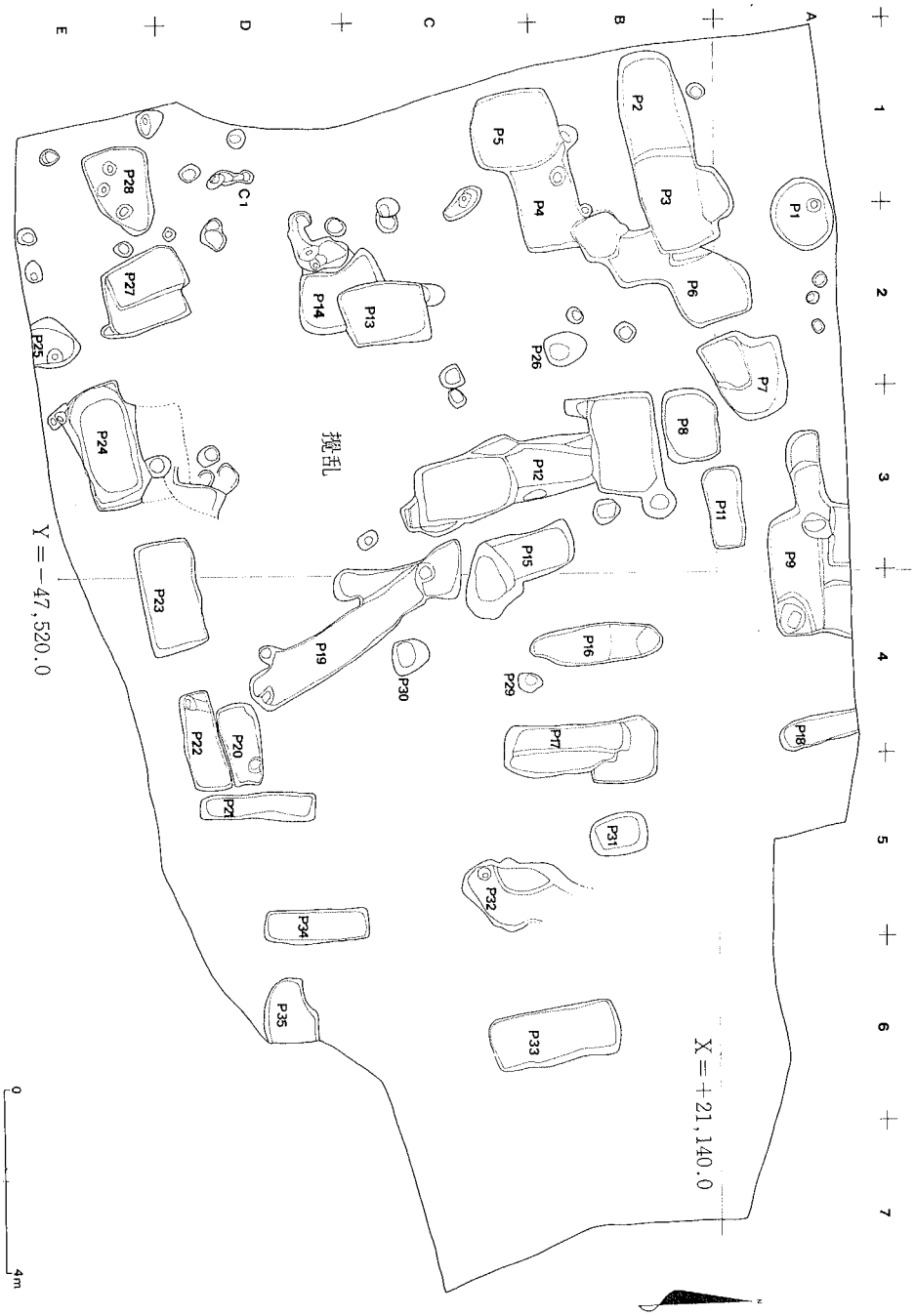
１月30日、座標北に揃えた４ｍ間隔のグリッド杭を設定した。グリッドは、北から南へアルファベットを、西から東へアラビア数字を付して呼称した。レベル測量の際の眼高は39.7ｍに統一することにした。

２月３日、第30号土坑より常滑大瓶片が出土した。５日、第31号までの土坑の調査をほぼ終了した。調査区東端部の黒色土部分にトレンチを４条加えたところ、第32号～第35号の４基の土坑を検出した。６日より柱穴の検出に力を注ぎ、調査区の西側に、柱間約1.8ｍの南北方向の柱穴列を検出した。８日、調査区の全体測量を行い、全景写真を撮影して現地発掘調査をほぼ終了し、12日、器材を撤収した。

検出された遺構は土坑と柱穴である。土坑は第35号（第10号は欠番）までナンバーを付したが、切り合い関係を含むものがあるため、実際の数は50基弱程度と考えられる。長さ２ｍ前後で東西又は南北方向の長方形のものが多いことが注目される。柱穴は単独のものだけでも30基近く確認できたが、径30～40cmほどの小さなものが多く、そのほとんど調査区の西側に集中していた。柱穴間に明確な関連性を見出せるものはほとんどないが、前述のように、１～２グリッドに約1.8ｍの間隔で直線的に並ぶものが７基確認でき、柵又は板塀のようなものの跡と考えられよう。

出土遺物はごくわずかであり、そのほとんどが微小破片であるが、青磁、常滑、灰釉陶器、土師質土器、瓦質土器、古銭（至大通宝）、鉄角釘、硯などがあり、14世紀後半～15世紀前半の城跡という遺跡の内容と矛盾しないものとなっている。

なお、現地発掘調査にあたり、寒さ厳しい時候ながら、国済寺住職の細見修学氏をはじめ、壇家役員の皆さんの積極的かつ熱心な御協力があった。この御協力により、調査はスムーズに進展し、予定より早く終了することができた。厚く感謝の意を表したい。



第４図　調査区全測図（１／160）

Ⅳ　遺構と出土遺物

1．遺　構

○第１号土坑（第５図）

Ａ―１・２グリッドに位置する。平面プランは1.6×1.3ｍほどの不整な長円形を呈し、深さは約20cmである。底面は平坦で、北隅にピット状の部分がある。

○第２号土坑（第５図）

Ｂ―１グリッドに位置し、第３号土坑に切られており。幅1.4ｍほどで、長方形状または長円形状を呈したものと思われる。深さは約35cmで、底面は平坦である。土師質皿と砥石が出土した。

○第３号土坑（第５図）

Ｂ―１・２グリッドに位置し、第２号土坑と第６号土坑を切っている。平面プランは2.3×1.5ｍほどの長方形状を呈するが、北辺は半円状に膨んでいる。深さは約40cmで、底面は緩い起伏がある。半円状に膨んだ部分の底面は皿状を呈する。土師質皿の破片、常滑甕の破片、角釘が出土した。

○第４号土坑（第５図）

Ｂ・Ｃ―１・２グリッドに位置し、第５号土坑、第６号土坑に切られている。平面プランは、幅1.35ｍほどの長方形を呈し、深さは約20cmである。底面は平坦で、北辺の近辺にピット状の部分が３ケ所ある。瓦質鉢の破片が出土した。

○第５号土坑（第５図）

Ｂ・Ｃ―１グリッドに位置し、第４号土坑を切っている。平面プランは1.95×1.7ｍほどの正方形に近い形を呈する。深さは約50cmで、底面は平坦である。灰釉陶器皿の破片、土鍋の破片が出土した。

○第６号土坑（第５図）

Ａ・Ｂ―２グリッドに位置する。第３号土坑に切られ、第４号土坑を切っているが、第６号土坑自体土坑２基以上の切り合いと考えられる。北側の土坑は、長さ約3.2ｍ、幅1.15～1.6ｍほどの不整なＬ字形を呈する土坑で、南側の土坑に切られている。深さは約20cmで底面は平坦であるが、第３号土坑との接辺付近に台状の部分がある。南側の土坑は、1.0～0.9ｍほどの不整な正方形に近い形を呈する土坑で、北辺と南辺の一部分が膨んでいる。深さは約30cmで、底面は平坦である。

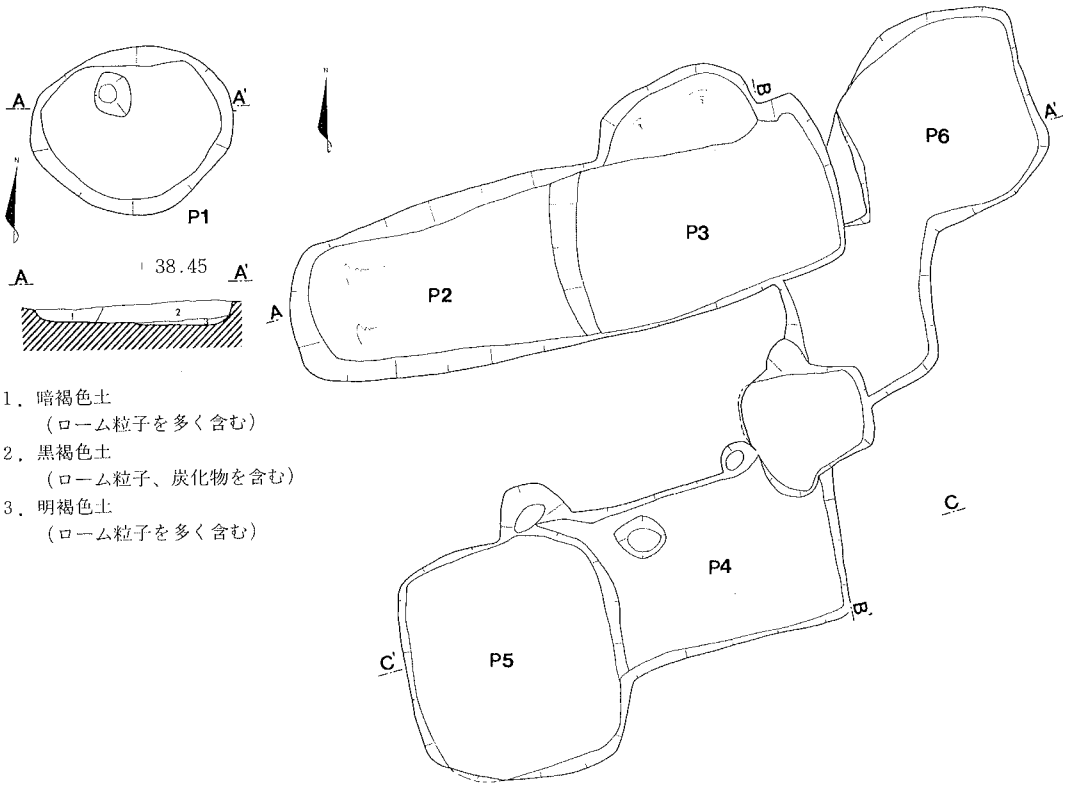
○第７号土坑（第６図）

Ａ・Ｂ―２・３グリッドに位置する。平面プランは2.0×1.6ｍほどの不整形を呈する。深さは10～15cmで、底面はかなり凹凸がある。

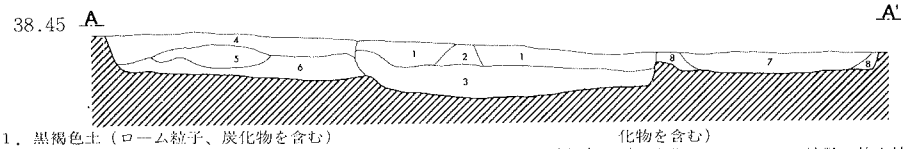
○第８号土坑（第６図）

Ｂ―３グリッドに位置する。平面プランは1.6×1.2ｍほどの長方形を呈する。深さは約10cmで、底面は平坦である。

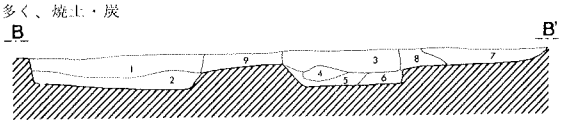
○第９号土坑（第６図）



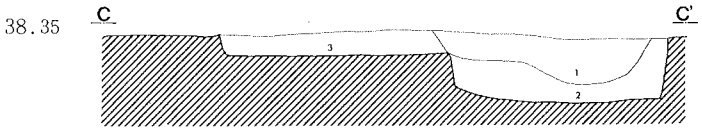
1．暗褐色土
（ローム粒子を多く含む）
2．黒褐色土
（ローム粒子、炭化物を含む）
3．明褐色土
（ローム粒子を多く含む）



1．黒褐色土（ローム粒子、炭化物を含む）
2．黄褐色土（ローム粒子を多く、炭化物、焼土粒子を含む）
3．暗褐色土（ローム粒子、炭化物、焼土粒子を含む）
4．黒褐色土（1より暗い。ローム粒子、炭化物、焼土粒子を含む）
5．黒褐色土（4より明るい。ローム粒子を多く、焼土・炭化物を含む）
6．暗褐色土（3より明るい。ローム粒子、焼土粒子、炭化物を含む）
7．〃　（ローム粒子を少量、焼土、炭化物を含む）
8．黄褐色土（ロームブロック）



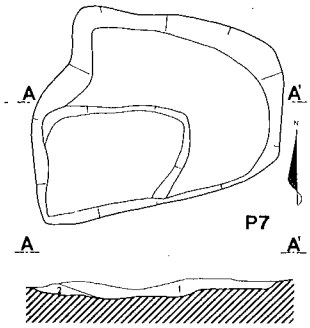
1．暗褐色土（ローム粒子、焼土粒子、炭化物を含む）
2．〃　（1より明るい。）
3．黒褐色土（焼土粒子を多く、ローム粒子、炭化物を含む）
4．明褐色土（ローム粒子・ブロックを多く含む）
5．黒褐色土（ローム粒子、焼土粒子、炭化物を含む）
6．暗褐色土（焼土粒子を多く、ローム粒子、炭化物を含む）
7．〃　（炭化物を含む）
8．黄褐色土（ローム粒子・ブロックを含む）
9．暗褐色土（ローム粒子を含む）



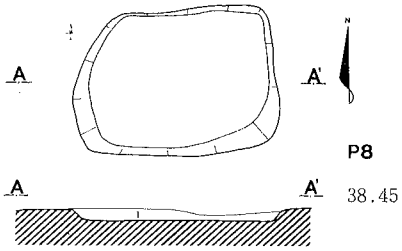
1．暗褐色土（ローム粒子・ブロックを多く、焼土、炭化物を含む）
2．黒褐色土（ローム粒子、焼土、炭化物を含む）
3．暗褐色土（ローム粒子、焼土、炭化物を含む）

0　2m

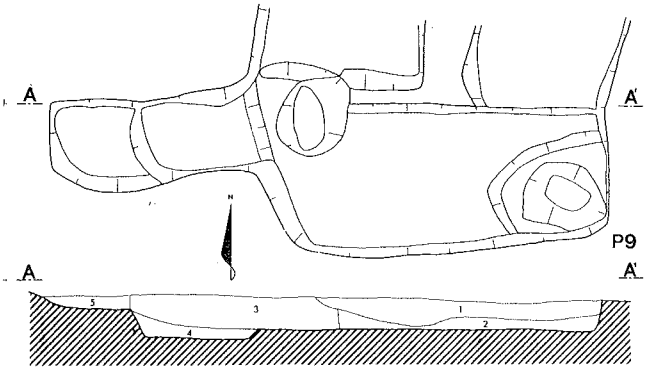
第5図　第1～6号土坑実測図（1／60）



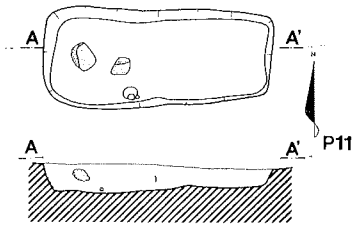
1．黒褐色土（ローム粒子、炭化物を含む）
2．黄褐色土（ロームブロック）



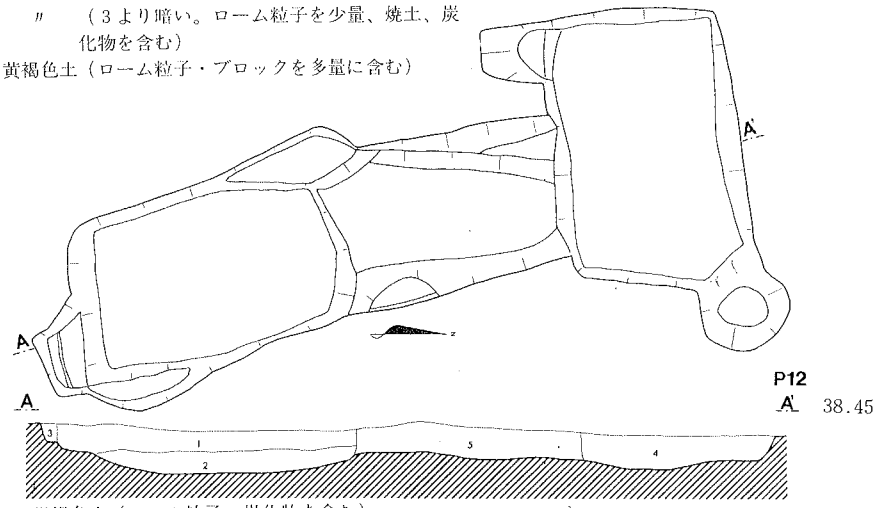
1．暗褐色土（ローム粒子、炭化物を含む）



1．黒褐色土（ローム粒子、焼土、炭化物を含む）
2．黄褐色土（ローム粒子、ブロックを多量に含む）
3．暗褐色土（ローム粒子を多く、焼土、炭化物を含む）
4．　〃　（3より暗い。ローム粒子を少量、焼土、炭化物を含む）
5．黄褐色土（ローム粒子・ブロックを多量に含む）



1．黒褐色土（ローム粒子、焼土粒子、炭化物を含む）



1．黒褐色土（ローム粒子、炭化物を含む）
2．　〃　（1より明るい。ローム粒子、砂を少量、炭化物を含む）
3．黄褐色土（ソフトローム）
4．暗褐色土（ローム粒子、炭化物を含む）
5．　〃　（4より明るい。ローム粒子・ブロックを多く含む）

0　2m

第6図　第7～12号土坑実測図（1／60）

A—3・4グリッドに位置し、少なくとも土坑3基以上の切り合いである。主体となる土坑は、平面プラン2.8×1.2mほどの長方形を呈し、深さは約25cmである。底面は平坦であるが、南東隅は中位に段を有して深くなっており、その深さは底面より約20cmである。また、北西隅にも径0.6m、底面よりの深さ約10cmほどの円形の窪みがある。西辺は、幅0.6m長さ1.6mほど突出している。

北辺は、東より、幅1.2m・幅1.3mほどの長方形を呈すると思われる土坑と切り合っている。それぞれの土坑とも、深さは約15cmである。

なお、主体となる土坑から、須恵質土器の破片が出土した。

○第11号土坑（第6図）

A・B—3グリッドに位置する。平面プランは1.8×0.8mほどの長方形を呈し、深さは約20cmである。底面は若干凹凸がある。底面より土師質皿が出土し、覆土中より大きめの礫が2個出土した。

○第12号土坑（第6図）

B・C—3グリッドに位置し、土坑3基以上の切り合いと考えられる。

北側の土坑は、平面プラン2.2×1.5mほどの長方形を呈し、中央の土坑を切っている。深さは約25cmで、底面には緩い起状がある。南西隅に突出部分があり、北東隅には径0.7m、深さ約30cmのピットがある。天目茶碗の破片が出土した。

中央の土坑は、幅1.3mほどの長方形を呈するものと思われ、北側・南側の土坑に切られている。深さは約25cmで、底面には緩い起伏がある。東辺・西辺とも壁はやや緩く立ち上がり、それぞれ台状となった部分がある。

南側の土坑は、平面プラン2.2×1.4mほどの長方形を呈し、中央の土坑を切っている。深さは約35cmで、底面は皿状になっており、南辺の東側は段状になっている。青磁皿の破片が出土した。

○第13号土坑（第7図）

C—2グリッドに位置し、第14号土坑に切られている。平面プランは1.8×1.4mの長方形を呈し深さは35～40cmで、底面は若干の傾斜がある。北辺は、幅0.5mほどの擂鉢状の形態を呈する長円形の土坑と切り合っている。灰釉皿、瓦質鉢、土師質内耳土器、土師質皿の、それぞれ破片が出土した。

○第14号土坑（第7図）

C・D—2グリッドに位置し、第13号土坑を切っている。平面プランは1.9×1.4mほどの不整な長方形を呈し、深さは20～25cmで、底面は平坦である。青磁茶碗の破片が出土した。

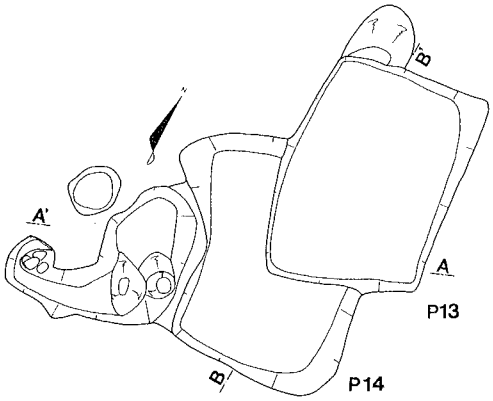
なお、西辺は複雑な形態の土坑に切られているが、この土坑には、径30～40cmほどの柱穴が3基以上絡んでおり、西端の柱穴の下層からは礫が数個出土した。

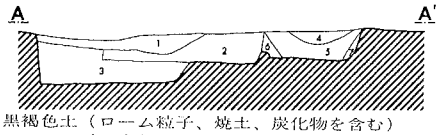
○第15号土坑（第7図）

B・C—3・4グリッドに位置する。土坑2基の切り合いである。

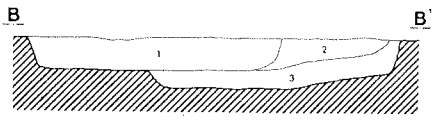
北側の土坑は、平面プラン1.5×1.2mほどの不整形を呈し、深さは25cmである。底面には凹凸がある。

南側の土坑は、平面プラン2.0×1.1mほどの長方形状を呈し、北側の土坑に切られている。深さは約25cmで、底面は平坦である。

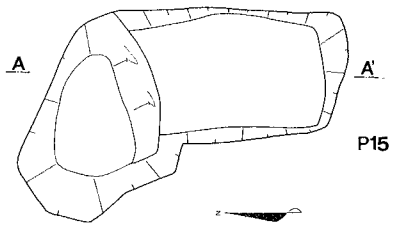




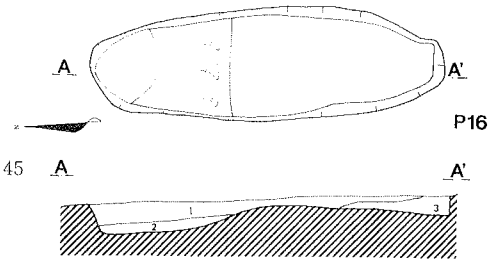
1．黒褐色土（ローム粒子、焼土、炭化物を含む）
2．〃　（1より明るい。ローム粒子、焼土、炭化物を含む）
3．暗褐色土（ローム粒子・ブロックを多く、炭化物を含む）
4．黒褐色土（ローム粒子、焼土、炭化物を含む）
5．〃　（4より明るい。ローム粒子、焼土、炭化物を含む）
6．黄褐色土（ロームブロックを多量に含む）
7．黄色土（ソフトローム）



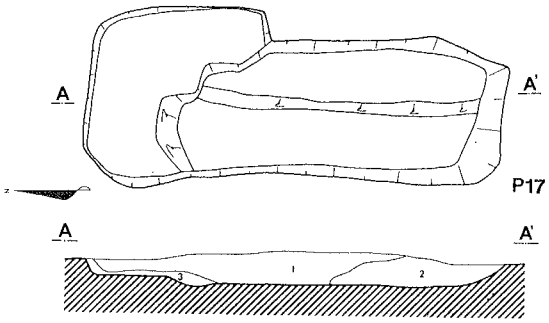
1．黒褐色土（ローム粒子、焼土粒子、炭化物を含む）
2．〃　（1より明るい。ローム粒子、焼土粒子、炭化物を含む）
3．暗褐色土（ローム粒子・ブロックを多く、焼土、炭化物を含む）



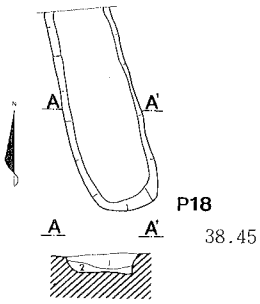
1．黒褐色土（ローム粒子を含む）
2．暗褐色土（ローム粒子を含む）
3．〃　（2より暗い。ローム粒子を含む）
4．〃　（ローム粒子、焼土粒子を含む）
5．黄褐色土（ロームブロック）
6．暗褐色土（4より明るい。ローム粒子、焼土粒子を含む）
7．黄褐色土（ローム粒子を多量に含む）
8．明褐色土（ローム粒子を多くに含む）



1．暗褐色土（ローム粒子、炭化物を含む）
2．明褐色土（ローム粒子・ブロックを多く含む）
3．黄褐色土（ローム粒子を多量に含む）



1．黒褐色土（ローム粒子、焼土粒子、炭化物を含む）
2．暗褐色土（ローム粒子、焼土粒子、炭化物を含む）
3．明褐色土（ローム粒子・ブロックを多く含む）



1．黒褐色土（ローム粒子、炭化物を含む）
2．黄褐色土（黒色土粒子を含む）

0　2m

第7図　第13～18号土坑実測図（1／60）

○第16号土坑（第７図）

Ｂ―４グリッドに位置する。平面プランは、2.8×0.9ｍほどの長円形状を呈する。底面は、中央から北側がなだらかに深くなっており、深さは５～25cmである。

○第17号土坑（第７図）

Ｂ・Ｃ―４・５グリッドに位置する。平面プランは長さ3.3ｍほどの長方形状を呈するが、東辺に屈曲部を有し、幅は北側で約1.4ｍ、南側で約1.1ｍである。底面は緩い傾斜をもって段状になっており、深さは10～25cmである。

○第18号土坑（第７図）

Ａ―４グリッドに位置する。北側は調査区外になるため、完掘はできなかった。平面プランは、幅0.55ｍほどの長方形状を呈するものと思われ、深さは約15cmで、底面は平坦である。

○19号土坑（第８図）

Ｃ・Ｄ―３・４グリッドに位置する。土坑２基の切り合いと考えられる。

南側の土坑は、平面プラン4.4×0.9ｍほどの長方形状を呈し、北側の土坑を切っている。深さは約10cmで、底面は平坦である。南端部に径30cmほどの擂鉢状の窪みがあり、南西部は径30cmほどの柱穴が絡んでいる。

北側の土坑は、南側の土坑に対し斜めに位置関係にある。平面プランは2.7×1.4ｍほどの不整な長方形を呈するが、北端は少し広がっている。深さは、南半が５～10cm、北半が10～20cmで、底面は南半は平坦であるが、北半は擂鉢状になっている。

○第20号土坑（第８図）

Ｄ―４・５グリッドに位置する。平面プランは1.8×0.8ｍの長方形状を呈し、深さは10～15cmである。底面は若干の凹凸があるが、北東隅に径30cmほどの擂鉢状の窪みがある。

○第21号土坑（第８図）

Ｄ・５グリッドに位置する。平面プランは2.5×0.8ｍの長方形を呈する。深さは約30cmで、底面は平坦である。

○第22号土坑（第８図）

Ｄ―４・５グリッドに位置する。平面プランは2.2×0.75ｍほどの長方形を呈し、深さは10～15cmである。底面は平坦であるが、南西隅に30×40cmほどの擂鉢状の窪みがある。

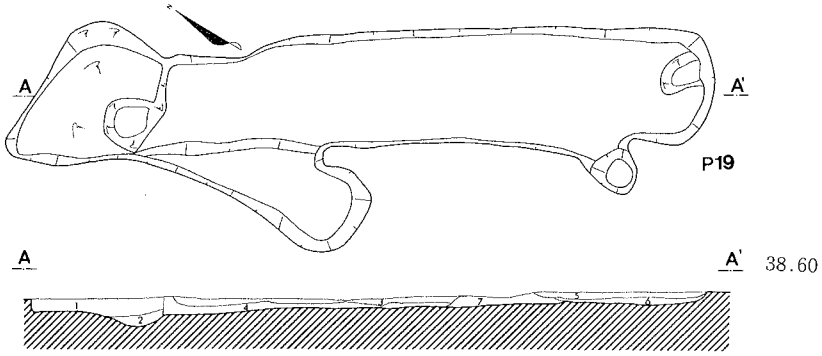
○第23土坑（第８図）

Ｄ・Ｅ―３・４グリッドに位置する。平面プランは2.5×1.2ｍほどの長方形を呈する。深さ約35cmで、底面は平坦である。

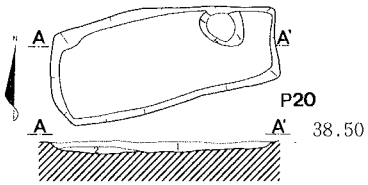
○第24号土坑（第８図）

Ｅ―３グリッドに位置する。平面プランは2.8×1.3ｍほどの長方形を呈するが、北辺は浅い攪乱を受けている。深さは約60cmで、底面は平坦である。壁は中位に稜を有し、西辺のコーナー部及び南辺に台状の部分がある。北東隅で径50cmほどの柱穴が絡んでおり、南西コーナー部で小ピットが２基絡んでいる。径50cmほどの柱穴の深さは約40cmである。

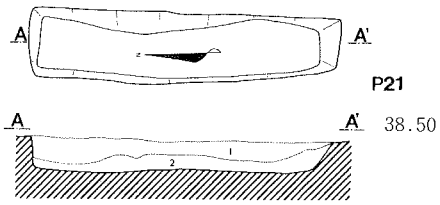
○第25号土坑（第９図）



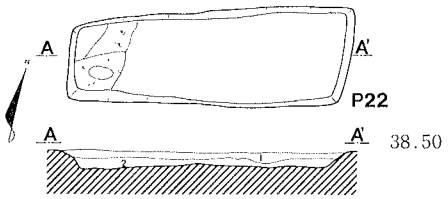
1．黒褐色土（炭化物を含む）
2．暗褐色土（ロームブロックをわずかに含む）
3．黒褐色土（ローム粒子、ブロックを多く、炭化物を含む）
4．暗褐色土（ローム粒子・ブロックを多量に、炭化物を含む）
5．暗褐色土（2に類似）
6．黒褐色土（3に類似）
7．黄褐色土（ローム粒子を多量に含む）



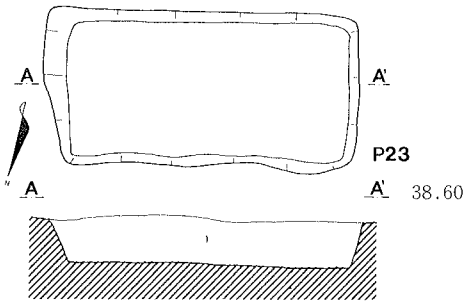
1．暗褐色土（ローム粒子を含む）
2．明褐色土（ローム粒子を含む）



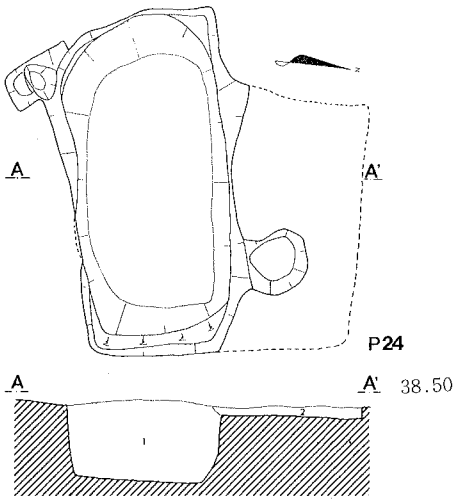
1．黒褐色土（ローム粒子。ブロックを含む）
2．暗褐色土



1．黒褐色土（ローム粒子を少量含む）
2．明褐色土（ローム粒子を多く含む）



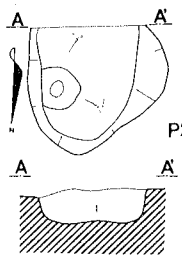
1．暗褐色土（ローム粒子・ブロックを多く含む）



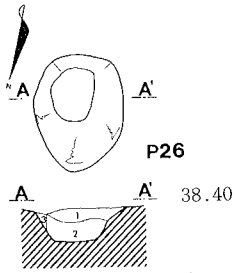
1．明褐色土（ローム粒子・ブロックを多量に、焼土、炭化物を少量含む）
2．攪乱

0　2m

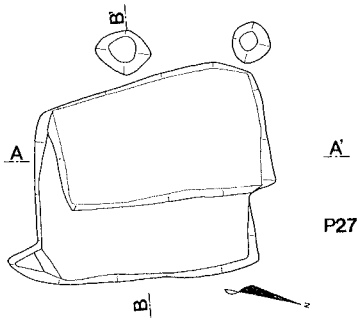
第8図　第19～24号土坑実測図（1／60）



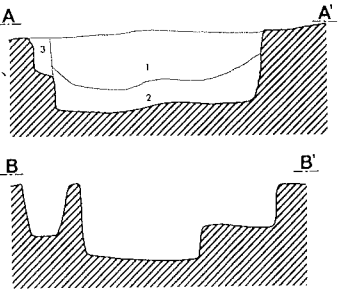
1．暗褐色土（ローム粒子、炭化物を少量、砂を含む）



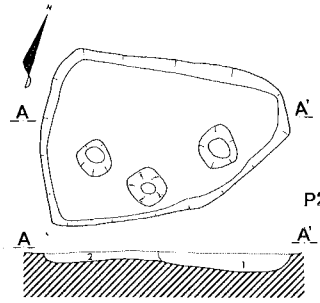
1．明褐色土（ローム粒子を多く、炭化物を含む）
2．暗褐色土
3．黄色土（ソフトローム）



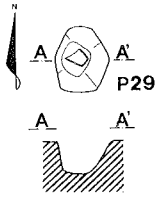
38.50

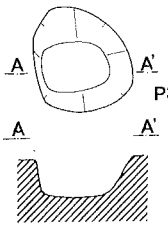


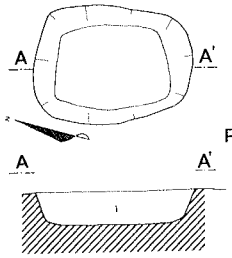
1．明褐色土（ローム粒子・ブロックを多量に、焼土粒子、炭化物を含む）
2．暗褐色土（ローム粒子、炭化物を含む）
3．暗褐色土（ローム粒子を含む）
38.50



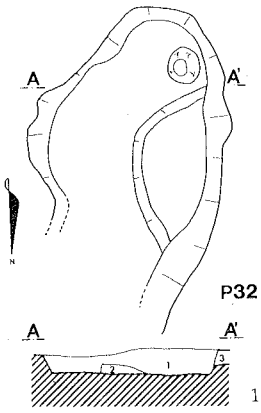
1．黒褐色土（焼土ブロックを多量に、炭化物を含む）
2．暗褐色土（ローム粒子を少量含む）



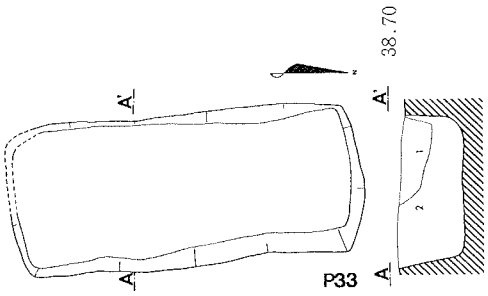




1．黒褐色土（ローム粒子、炭化物を含む）



1．暗褐色土（ローム粒子を含む）
2．黄色土（ロームブロック）
3．黒色土（泥炭質、ローム粒子を含む）



1．黒褐色土（ローム粒子、焼土粒子を含む）
2．　〃　（ローム粒子・ブロックを含む）

0　2m

第９図　第25～33号土坑実測図（１／60）

E－2グリッドに位置する。南半は調査区外のため完掘はできなった。幅1.1mほどで、深さは約20cmである。底面は擂鉢状になっている。

○第26号土坑（第9図）

B－2グリッドに位置する。平面プランは0.9×0.7mほどの卵形を呈し、深さ約25cmの小土坑である。底面は擂鉢状を呈する。

○第27号土坑（第9図）

D・E－2グリッドに位置する。土坑2基の切り合いである。

西側の土坑は、平面プラン1.7×1.0mほどの長方形を呈し、東側の土坑を切っている。深さは約60cmで、底面は平坦である。硯の破片が出土した。

東側の土坑は、平面プラン1.7×1.4mほどの長方形を呈するものと思われる。深さは約30cmで、底面は平坦である。

○第28号土坑（第9図）

E－1・2グリッドに位置する。平面プランは、1.95×1.3mほどの不整形を呈する。深さは5～15cmで、底面は緩い起状がある。径30cmほどの柱穴が3基あるが、この土坑との関係は不明である。それぞれの柱穴の底面からの深さは、西から約20cm、約10cm、約20cmである。なお、この土坑の北東部分には焼土塊が検出されており、土師質皿が出土している。

○第29号土坑（第9図）

B・C－4グリッドに位置する。平面プラン0.5×0.4m、深さ約30cmの小土坑であるが、常滑大瓶の破片が出土した。

○第30号土坑（第9図）

C－4グリッドに位置する。平面プランは0.9×0.75mほどの不整な卵形を呈し、深さは約35cmである。底面は平坦である。

○第31号土坑（第9図）

B－5グリッドに位置する。平面プランは1.25×0.95mほどの不整な長方形を呈し、深さは約30cmである。底面は平坦である。

○第32号土坑（第9図）

B・C－5グリッドに位置する。北側の形態は不明であるが、平面プランは幅1.1～1.6mほどの不整形を呈する。深さは20～25cmで底面は平坦であるが、西側に段差があり、南西隅に径25cmほどの窪みがある。

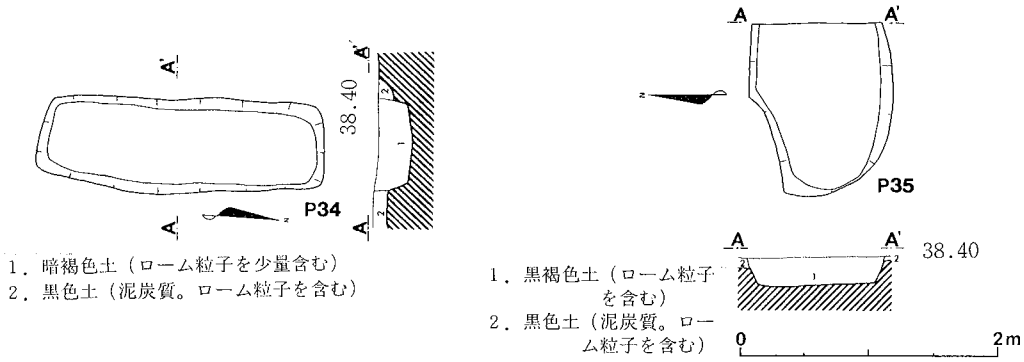
○第33号土坑（第9図）

B・C－6グリッドに位置する。平面プランは2.8×1.2mほどの長方形を呈する。深さは約45cmで、底面は平坦である。土師質皿の破片が出土した。

○第34号土坑（第10図）

C・D－5グリッドに位置する。平面プランは2.25×0.75mほどの長方形を呈する。深さは約45cmで、底面は平坦である。

○第35号土坑（第10図）



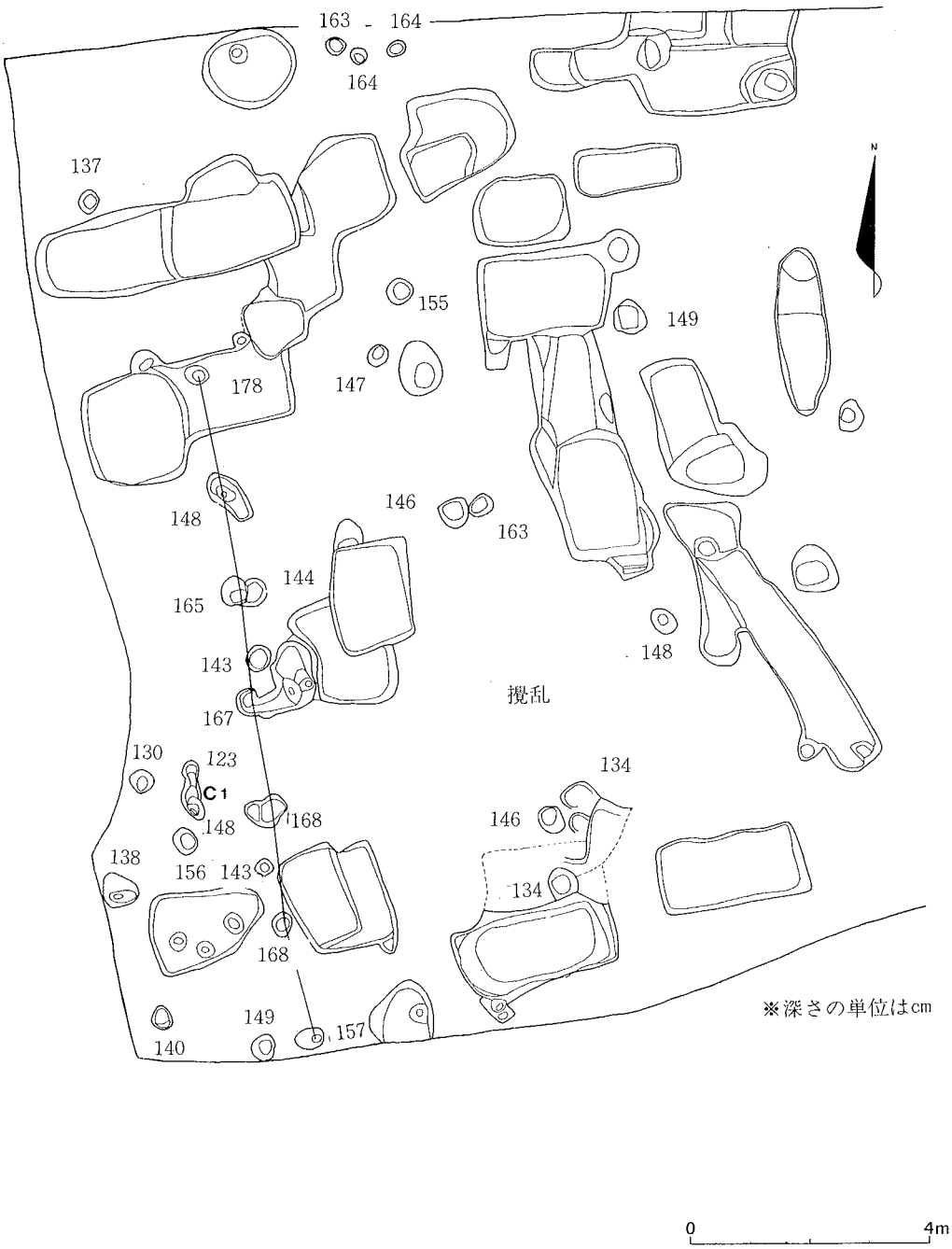
第10図　第34・35号土坑実測図（１／60）

Ｂ－６グリッドに位置する。東半は調査区外のため、完掘できなかった。幅1.1ｍほどの不整形を呈するものと思われ、深さは約25cmである。

○柱穴列（第11図）

調査区の柱穴が集中して検出された。径30～40cmほどのものが多く、径20cm程度の小さなものがある。柱根等は観察しえなかった。これらは、南北または東西方向に関連しそうなものもあるが、明確な関連性はほとんど見出せない。その中で、１・２グリッド内に、ほぼ南北方向に、約1.8ｍの間隔で直線的に並ぶ柱穴が７基あることが観察され（第10図中の線で結んだもの）、柵または塀などの可能性が考えられよう。その方位はＮ－８°－15°－Ｗである。

なお、第10図に記した柱穴の深さは、比較のために標高39.7ｍの高さから測った数値にしてある。また、第10図中のＣ１からは、古銭（至大通宝）が一枚出土した。



第11図　調査区西側柱穴実測図（1／120）

2．出土遺物

○**第2号土坑出土遺物**（第12図1・2）

1．土師質皿の底部破片である。推定底径7.5cm。底面は回転糸切り。底部内面に指紋の痕跡がある。胎土砂を少し含み、焼成良好、淡橙褐色を呈する。

2．砥石の破片である。幅2.8cm。両端部及び背面を欠損しているが、図の上面がよく使用されている。石質は凝灰岩である。

○**第3号土坑出土遺物**（第12図3～5）

3．土師質皿の底部破片である。推定底径6.5cm。底面は回転糸切り。胎土砂を少し含み、焼成良、外面淡橙褐色、内面淡灰褐色を呈する。

4．常滑瓶の胴部破片である。外面素地は褐色を呈し、上位には緑褐色の釉がかかっている。内面は、指の押圧の後ナデられている。胎土は砂・小石を含み灰色を呈し、焼成は堅緻である。

5．鉄製の角釘である。先端を欠損している。残存部分の長さ6.0cm、太さ0.4～0.8cm、重さ6.4g。全体の腐食が激しい。頭部上面は斜めになっている。

○**第4号土坑出土遺物**（第12図6）

6．瓦質鉢の口縁部破片である。推定口径26.5cm。かなり開いた器形を呈する。口唇部は外側へ突出し、上面は受け状になっている。胎土砂を含み、焼成良好、黒褐色を呈する。

○第5号土坑出土遺物（第12図7・8）

7．灰釉陶器皿の口縁部破片である。推定口径15.0cm。口唇部は少し外反している。内外面に緑灰色の釉が施されており、貫入が認められる。胎土は微細で灰白色を呈し、焼成は堅緻である。

8．瓦質土鍋の底部破片であろう。外面はヘラ状工具で削った後、ナデられているようである。内面はロクロ痕明瞭、底面はよくナデられている。外面にわずかに炭化物付着。胎土砂を多く含み、焼成良好、外面黒灰色、内面灰色を呈する。なお、底径は25cm前後のようである。

○**第9号土坑出土遺物**（第12図9）

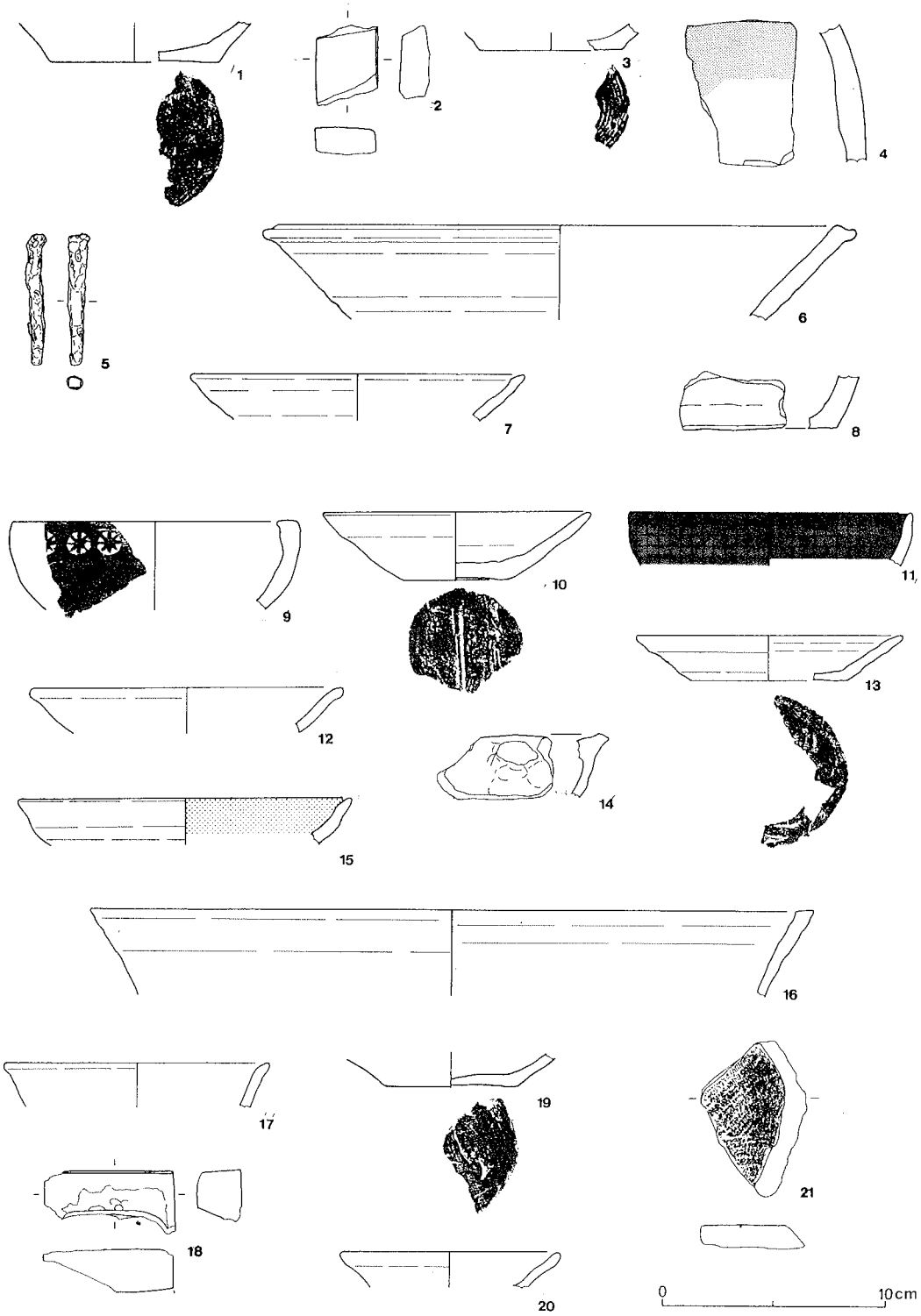
9．須恵質土器の口縁部破片である。小鉢形を呈するものであろう。推定口径13cm弱。口唇部上面は平坦で、わずかに内側へせり出している。体部は丸い。内面はロクロ痕明瞭。外面は若干凹凸があり口縁部に形押しによる八弁花文が並んでいる。胎土砂を少し含み、焼成良好、灰白色を呈する。

○**第11号土坑出土遺物**（第12図10）

10．土師質皿である。推定口径12.0cm、底径4.7cm、器高3.1cm。内面に一部に煤が付着しており、灯明皿として使用されたものと思われる。体部は直線的に開き、口唇部は細い。底面には柾目痕がみられる。胎土砂を少し含み、焼成良好、淡灰褐色を呈する。

○**第12号土坑出土遺物**（第12図11・12）

11．いわゆる天目茶碗の口縁部破片である。第12号土坑北側の土坑より出土した。推定口径12.5cm。口縁部はわずかにくびれている。内外面に黒色の鉄釉が施されており、貫入が認められる。胎土は微細で灰白色を呈し、焼成は堅緻である。



第12図　出土遺物実測図(1)（１／３）

12. 青磁皿の口縁部破片である。第12号土坑南側の土坑より出土した。推定口径14.0cm。口唇部は少し外反している。釉はわずかに緑色を帯びた淡灰色を呈する。胎土は微細で灰色を呈し、焼成は堅緻である。

○第13号土坑出土遺物（第12図13～16）

13. 土師質の皿である。推定口径12.0cm、推定底径7.0cm、器高1.9～2.3cm。体部は直線的に開く。底部は薄く、底面は回転糸切り。外面に、ロクロ調整の後の、斜めの指ナデ痕がある。胎土砂を少し含み、焼成良、淡褐色～黒褐色を呈する。

14. 土師質の内耳土器の破片である。口唇部は若干外反し、上面は平坦。内耳は欠損しており、その下は内側から指の押圧が加えられている。胎土砂・小石を含み、焼成良、橙褐色を呈する。

15. 灰釉皿の口縁部破片である。推定口径15.0cm。口唇部は少しくびれている。内外面とも緑色を帯びた灰釉が施され、細かい貫入が認められる。胎土は細かく灰色を呈し、焼成は良好で、須恵質である。

16. 瓦質鉢の口縁部破片である。推定口径32.5cm。こね鉢状の形態を呈するものと思われる。口唇部上面は平坦である。体部は外傾して直線的に開く。ロクロ調整。外面に炭化物付着。胎土砂を少し含み、焼成良好、暗褐色を呈する。

○14号土坑出土遺物（第12図17）

17. 青磁碗の口縁部破片である。推定口径12.0cm。口唇部はわずかに外反している。釉は淡緑灰色を呈する。胎土は微細で灰白色を呈し、焼成は堅緻である。

○第24号土坑出土遺物（写真図版一１・２）

ともに青磁の破片である。１は、胎土を横位に削って釉をかけることにより、縞模様を表出している。釉は暗緑灰色を呈する。胎土は微細で淡灰白色を呈し、焼緻である。２は、胎土を削って草花文と思われる文様が描かれている。釉は淡緑色を呈する。胎土は微細で白色を呈し、焼成は堅緻である。

○第27号土坑出土遺物（第12図18）

18. 碩の破片である。大半を欠損しているが、碩池がわずかに認められる。残存部分は、幅5.8cm、厚さ1.9cmである。石質は凝灰岩である。

○第28号土坑出土遺物（第12図19）

19. 土師質皿の底部破片である。推定底径6.5cm。底面は回転糸切り。胎土砂を少し含み、焼成良淡褐色を呈する。

○第29号土坑出土遺物（第13図22）

22. 常滑大瓶の口縁部である。推定口径44cm。口唇部は上下に突出しており、肩部が張る器形を呈するようである。外面頸部以下、内面口縁部などに緑灰色の灰釉が施されている。素地は濃茶色の鉄釉状を呈する。内面下位の調整は粗い。胎土は砂・小石を含み、灰色を呈する。焼成は堅緻である。

○第33号土坑出土遺物（第12図20・第13図23）

20. 土師質皿の口縁部破片である。推定口径10.0cm。内外面に油煙が付着しており、灯明皿として

使用されたものであろう。胎土砂を少し含み、焼成良、黒褐色を呈する。

23. 鉄釉陶器の頸部から肩部にかけての破片である。壺形を呈するものであろう。外面全面及び内面頸部に黒色の鉄釉が施されている。外面肩部には若干の凹凸がある。胎土微細、砂を少し含み、灰色を呈する。焼成は堅緻である。

○柱穴出土古銭（第13図32）

32. 第10図Ｃ１から出土した至大通宝である。左側の一部を欠損している。口径2.3cm、重さ2.4ｇ緑青が全体にふいており、保存状態は良くない。なお、至大宝は、元銭で初鋳1310年である。この銭貨の出土例は比較的少ない。

○グリッド出土遺物（第12図21・第13図24～31）

第11図21、第12図24～26は、調査区の５グリッド以東の、薄く堆積した黒色土部分より出土したものである。

21. 石臼の破片である。磨面の細い溝が認められる。石質は輝石安山岩である。

24. 土師質鉢の底部破片である。推定底径11.0cm、残存高4.4cm。体部は外傾して開く。底面はあまり調整されていない。胎土砂を少し含み、焼成良、外面黄褐色、内面灰褐色を呈する。

25. 磁器質の小鉢形を呈すると思われる口縁部破片である。口唇部は外側へせり出している。内外面とも飴釉状の透明な緑灰色の釉が施されており、細かい貫入が認められる。胎土は微細で灰白色を呈し、焼成は堅緻である。

26. 瓦質土器の内彎する口縁破片である。外面に形押しによる渦巻状の菱形文が並んでいる。内外面ともよく磨かれている。胎土は淡褐色を呈し、焼成は良好、器面は黒色を呈する。

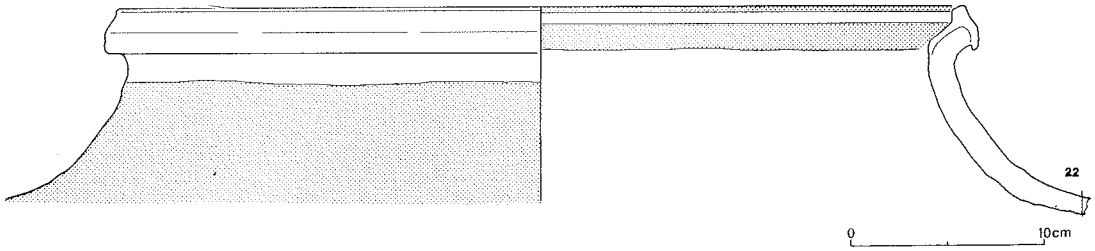
27. 土師質皿である。推定口径9.0cm、推定底径5.0cm。器高1.9cm。灯明皿として使用されたものであろう。体部は外反して開き、口唇部は細く鋭い。底面はやや磨滅しているが、回転糸切りの後の指ナデのようである。胎土砂を少し含み、焼成良好、黒褐色を呈する。

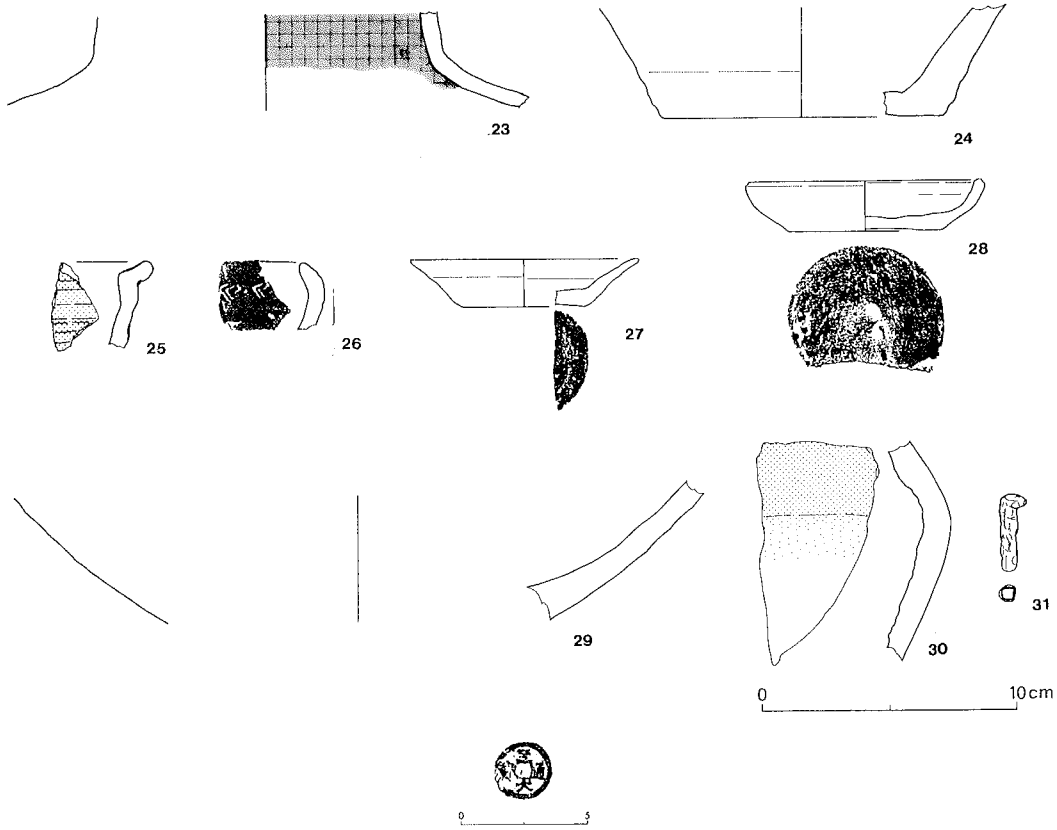
28. 土師質皿である。口径9.4cm。底径6.0cm。器高2.0cm。灯明皿であろう。体部は内彎し、口唇部は丸い。底面は回転糸切り、ロクロは左回転。胎土砂を含み、焼成は良好で瓦質に近く、黒灰褐色を呈する。

29. 陶器鉢の破片である。外面は縦方向にナデ痕がみられ、ごく薄い灰釉により、横縞模様が施されている。胎土は微細で橙褐色を呈し、焼成堅緻、外面素地は褐色、内面は暗赤褐色を呈する。

30. 常滑瓶の胴部中位の破片であろう。外面上位の灰白色の自然釉が霜降り状にかかっている。内面にはヘラ状工具によると思われる横位の沈線状の形成痕が認められる。胎土は砂・小石を含み、灰色を呈する。焼成堅緻、外面の素地は黒灰色、内面は灰色を呈する。

31. 鉄製の角釘である。下半を欠損している。残存部分の長さ3.1cm、太さ0.5～0.7cm、重さ3.4ｇ。全体に腐食が激しい。頭部は扁平になっている。





第13図　出土遺物実測図(2)（１／４・３・２）

V　まとめ

この発掘調査で検出された遺構のうち、最も目立つのは、平面プランが長方形を呈する土坑である。その多くは東西又は南北を向いており、長円形を呈するものを含めて規模・方位等をまとめると下表のようになる。

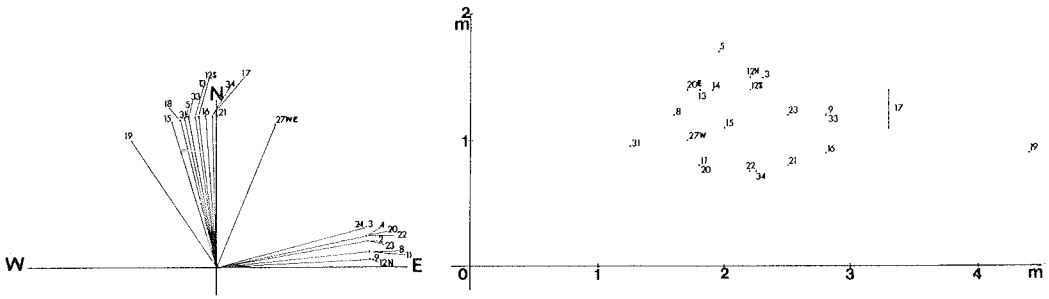
番　号	長さm	幅　m	深さcm	方　　位
P 2	—	1.4	35	N—80°—E
P 3	2.3	1.5	40	N—75°—E
P 4	—	1.35	20	N—78°—E
P 5	1.95	1.7	50	N—11°—W
P 8	1.6	1.2	10	N—84°—E
P 9	2.8	1.2	25	N—87°—E
P11	1.8	0.8	20	N—84°—E
P12北	2.2	1.5	30	N—87°—E
P12南	2.2	1.4	35	N—7°—W
P13	1.8	1.4	35～40	N—8°—W
P14	1.9	1.4	30～40	—
P15	2.0	1.1	25	N—17°—W
P16	2.8	0.9	5～25	N—4°—W
P17	3.3	1.1～1.4	10～25	N—2°—W

番　号	長さm	幅　m	深さcm	方　　位
P18	—	0.55	15	N—14°—W
P19	4.4	0.9	10	N—34°—W
P20	1.8	0.8	10～15	N—78°—E
P21	2.5	0.8	30	N
P22	2.2	0.75	10～15	N—78°—E
P23	2.5	1.2	35	N—80°—E
P24	2.8	1.3	60	N—75°—E
P27西	1.7	1.0	60	N—22°—E
P27東	1.7	1.4	30	N—22°—E
P31	1.25	0.95	30	N—12°—W
P33	2.8	1.2	45	N—11°—W
P34	2.25	0.75	45	N—2°—W
柱穴列				

※—は不明。Nは座標北を示す。

以上をグラフ化すると下図のようになる。規模にはややばらつきがあるが、長さ1.7～2.8m、幅0.8～1.5mの範囲に大半が含まれることは注目しておいてよかろう。方位は、P19・P27西・P27東を除き、東西又は南北にかなりの統一性がみとめられる。

中世～近世の遺跡において、こうした南北又は東西を向く長方形の土坑群が検出された例は多い。土坑の方位の統一性は、構築時期の近接性・構築目的の同一性或るいは類似性を示すものと考えられている。城館跡もその例外ではないが、出土遺物が少ないこともあって、城館跡における長方形



第14図　土坑の方位と規模

土坑の性格は定かではない。美里町白石城跡（註１）では城の関連施設と考えられており、桶川市加納城跡（註２）では、仕事場であったという推定がなされている。

さて、この庁鼻和城跡発掘調査でも出土遺物はごく僅かであったが、中では常滑大瓶の破片、青磁の破片などが注目されよう。第29号土坑出土の常滑大瓶（第13図22）は、14世紀前半の製作と推定され、第12号・14号・24号の各土坑出土した青磁の破片は、いずれも微小なものであるが、中国青磁であり、元代の製作と推定される（浅野晴樹氏の御教示による）。庁鼻和城は、第II章で述べたように、14世紀後半の構築と推定されている。上記の常滑・青磁は、伝世等の可能性も含めて考えれば、庁鼻和城の構築時期とは、大筋において矛盾はないものと考えられよう。

今回の発掘調査で検出された土坑・柱穴などの遺構は、上記の先例や研究などを参照し、その大半が城の付属施設として、14世紀後半以降に比較的集中して構築されたものと考えておきたい。積極的な根拠が希薄であることは否めないが、柵又は板塀等の跡とも推定される柱穴列の方位が土坑の方位と類似し、別の柱穴の一つから元銭（至大通宝）が出土したことも暗示的である。

なお、国済寺住職、細見修学氏が、国済寺境内の当発掘調査地において近世以降に、墓坑を含めて土坑等が堀削されたことは考えられない、と仰っていたことも記しておきたい。

最後に、今回の発掘調査には直接関係はないが、上杉憲信の没年について気づいたことを付記しておきたい。庁鼻和城の終焉過程の検討などに、多少なりとも影響があると思われるからである。

上杉憲信は、庁鼻和城を築いたとされる上杉憲英の孫にあたり、入道して性順と号し、庁鼻和性順、庁鼻和六郎とも記される。諸系図によれば、官職は右馬助或いは武蔵守とされ、私市（騎西）城主と記したものもあるが、騎西町にはこれを裏付ける資料は今のところないようである。永享の乱（1438～39）、結城合戦（1440～41）、古河公方足利成氏との抗争などに活躍し、主に長尾景仲と行動を共にしている。没年は不明だが、諸系図には正月21日又は22日没と記されている。

武家事紀所収の康正２年（1456）４月４日付け足利氏書状に、前年（1455）12月３日・６日に騎西城において庁鼻和六郎・七郎らと戦って勝利したことが記されており、憲信はこの時に傷を受けて翌年（1456）正月21日又は22日に没したとう説が有力視されている。ところで、同書状写の前半に、前年の享徳４年（1455．７月に康正に改元）正月21日・22日の高幡・分倍河原の合戦において、上杉右馬助入道と同名三郎大夫を討取ったことが記されている。「鎌倉大草子」では、右馬助入道を上杉禅秀の三男憲顕としているが、「鎌倉九代後期」には憲顕は宮内大輔と記されており、中務大輔と記される系図もあるらしい。すなわち、三郎大夫が憲顕の可能性があり、右馬助入道は憲信を指す可能性があるのである。内容的には異同のある諸系図が、憲信の没月日については一致して高幡・分倍河原の合戦と同じ日付けの正月21日又は22日としている点も見逃せまい。「鎌倉大草子」では、庁鼻和六郎・七郎は憲信と弟の憲明を指しているが、上記足利成氏書状における庁鼻和六郎・七郎は、憲信の兄憲長の子、憲武と憲視を指す可能性も残されていよう。

いずれにせよ上記資料に内容的な混乱があることが認められ、その原因を断定する力は筆者にはない。文献資料に全く疎い筆者の指摘は、甚だ心もとないが、検討の余地は残されていよう。

註１　中村倉司　「白石城」　昭和54年10月　埼玉県遺跡調査会
註２　塩野　博　「加納城跡」（「桶川の館城跡」所収）　昭和60年３月　桶川市教育委員会

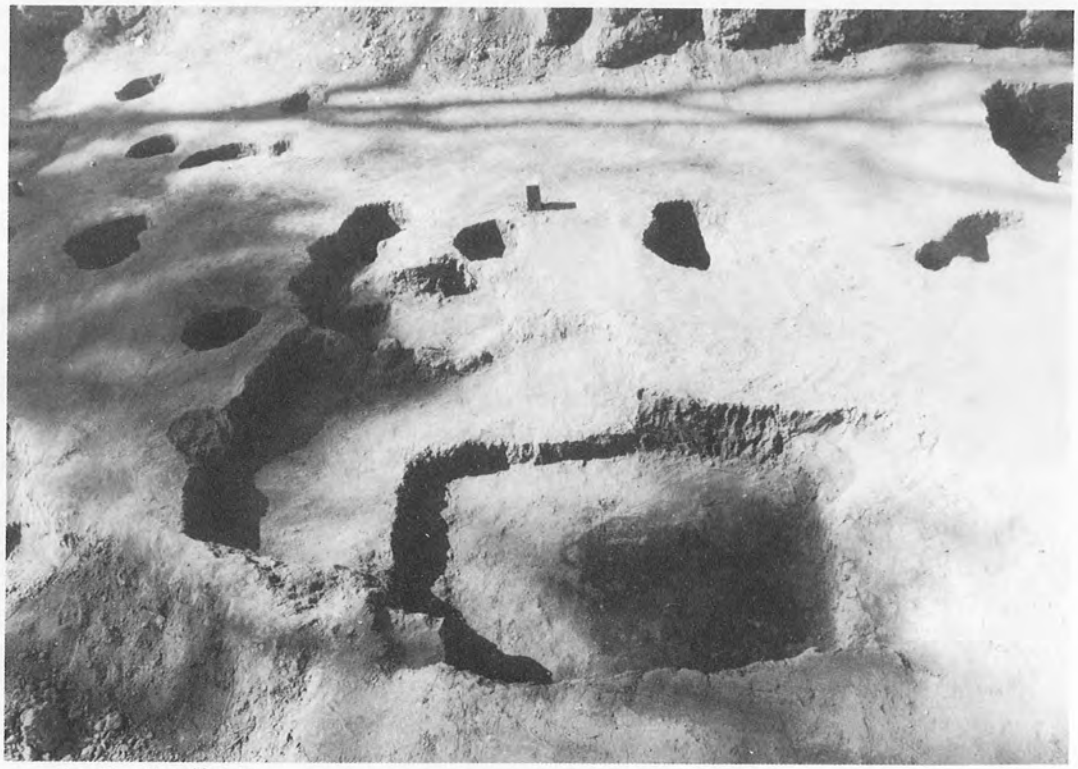
写　真　図　版

図版 1

1．調査区全景（西より）

2．調査区全景（東より）

3．第２号・第３号土坑

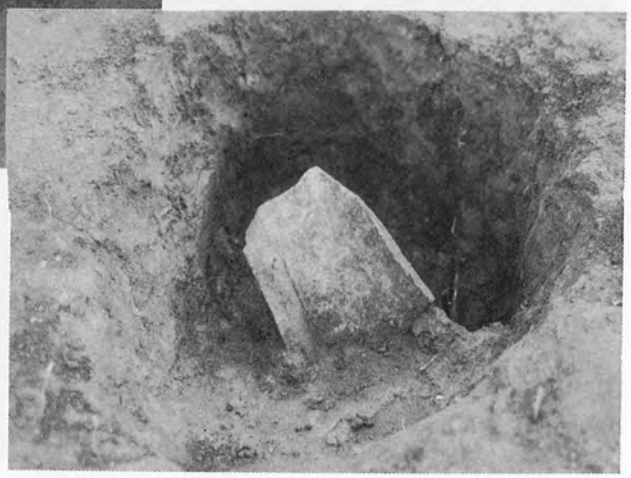


4．第13号・第14号土坑

図版 3

5．第24号土坑

6．第11号土坑遺物出土状態

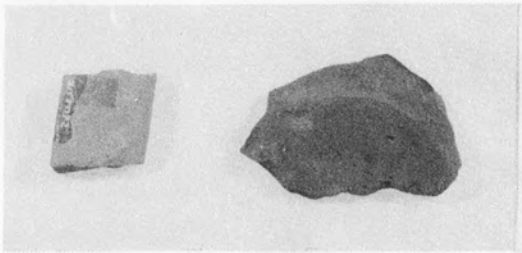


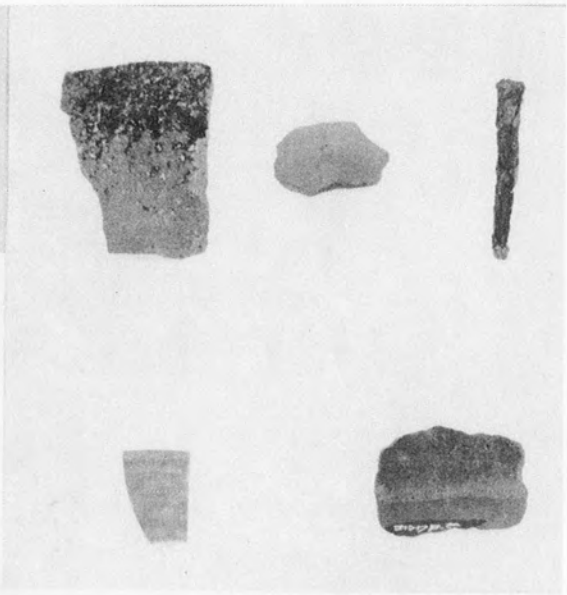
7．第29号土坑遺物出土状態

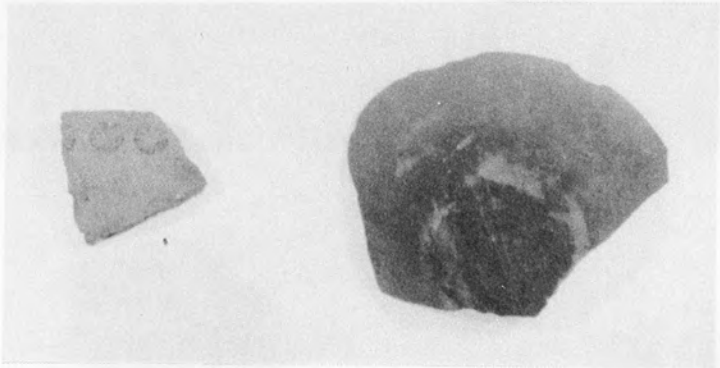
8．調査区西側柱穴列

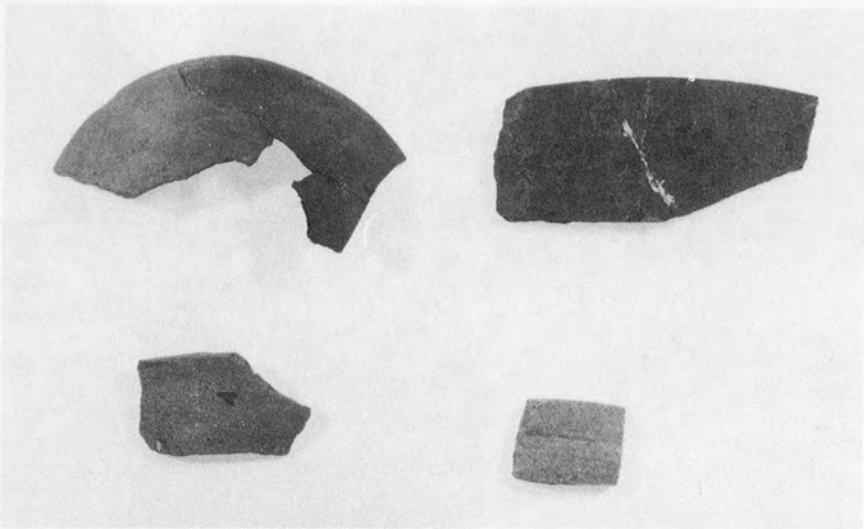
9．調査風景

図版 5

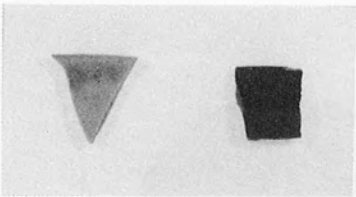


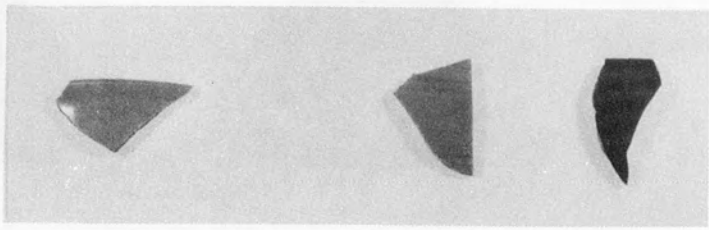


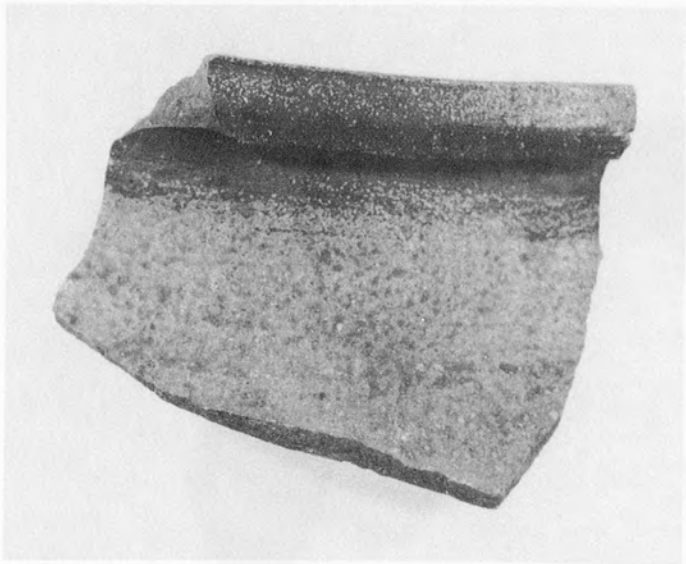




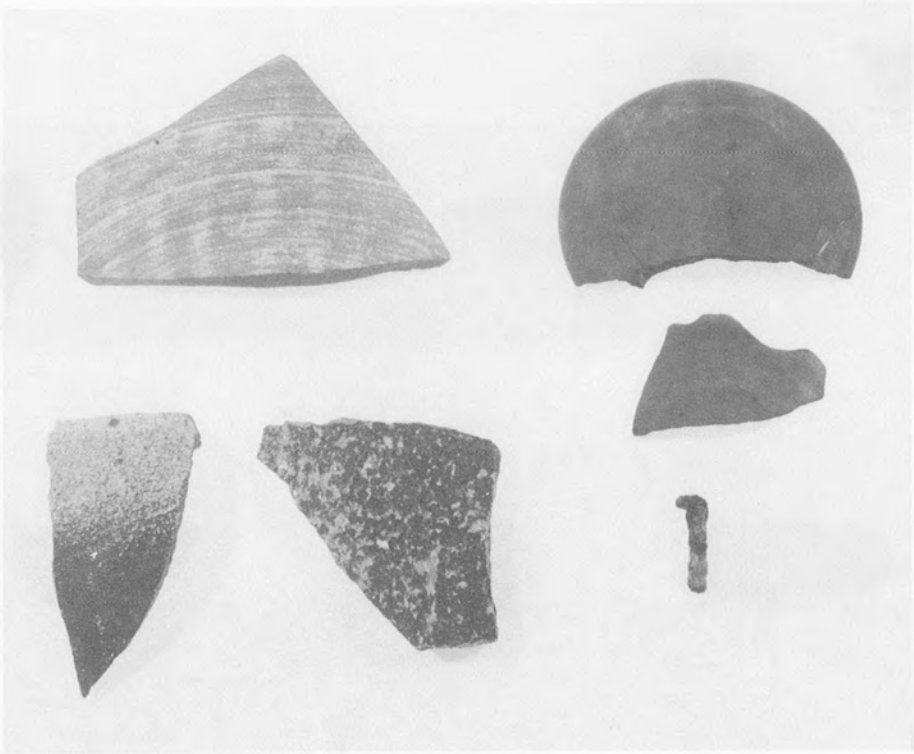
10. 出土遺物(1)

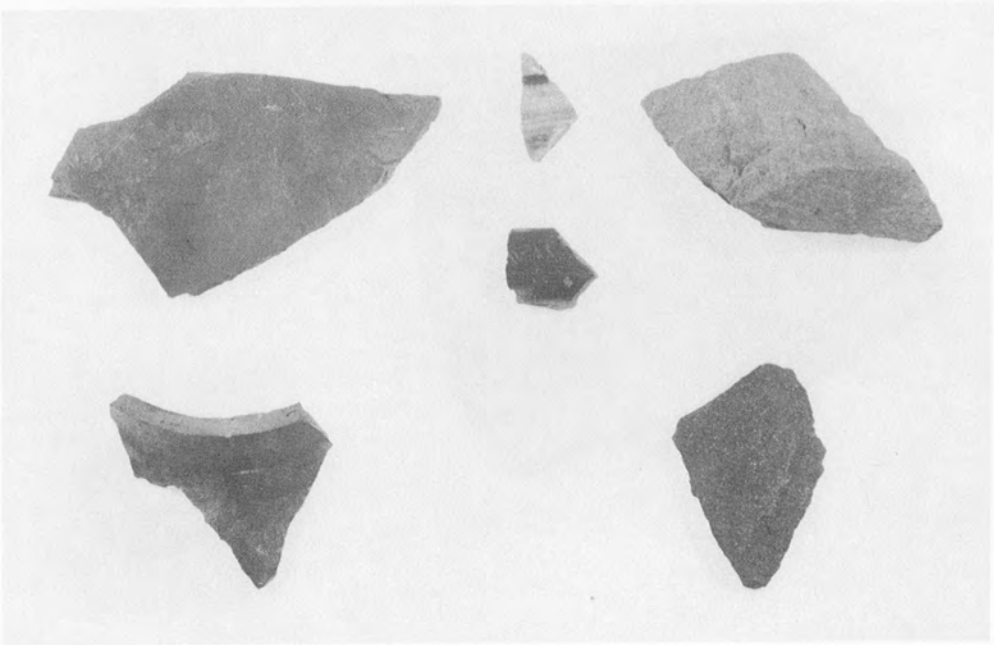






11．出土遺物(2)





12. 出土遺物(3)

埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書　第15集

庁　鼻　和　城　跡

印刷　昭和62年２月20日
発行　昭和62年３月９日

発　行　深　谷　市　教　育　委　員　会
印　刷　大　屋　印　刷　株　式　会　社

正　誤　表

部　分	誤	正
序・l 10	俊翁令山禅師	峻翁令山禅師
p 2・l 18	寄居面の環境付近に	寄居面の境界付近に
p 4・l 10	南長方の新田氏の	南朝方の新田氏の
〃・l 19	私立城主とする	私市城主とする
p10・P2-6B2層	1より明るい。	1より暗い。
p 22・l 21	焼緻である。	堅緻である。
p 23・l 6	口径2．3㎝	径2．3㎝
〃・l 7	なお、至通宝は、	なお、至大通宝は、
p 26・l 22	足利氏書状に	足利成氏書状に
〃・l 24	没したとう説が	没したという説が